とある高校生のお話

soku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある高校生のお話

【Ｎコード】
Ｎ４９３８Ｏ

【作者名】
ｓｏｋｕ

【あらすじ】
特別でもなく、ありえなくもない。
ただ少し他人とは違う「僕」が、少し普通ではない高校生達と出会い、過ごしていくお話。

5月25日　午後5時30分～（前書き）

登場人物の名前、出来事は全て架空のものです。
実在する人物とは関係ありません。

5月25日　午後5時30分〜

他人の心を読もうとする人は多い。
顔色を窺う、という言葉はその典型だろう。相手の機嫌をとり、自分が優位に立とうとする。それは社会でも、友人関係でも、恋愛でも、かわらない駆け引きだ。そしてその能力に優れていることを、人は「鋭い」という。
これは人より少し鋭すぎた、そんな人のお話。

5月25日　午後5時30分〜

「なぁーなぁー…。」
「……。」
「おい！ケーシィ！」
肩をはたかれた。僕はヘッドホンをはずし、声の主に向き直る。
「あぁ…田中か…。」
話しかけてきたのは田中である。ショートにまとめた頭に日焼けした顔。その顔に白い歯が映える。ほれぼれするほどの歯並びの良さに僕はいつも感心してしまう。芸能人は歯が命なら、こいつはきっと不老不死に違いない。
「今度駅前に行こうぜ！新しいゲーセンできんたんだってよ！」
こいつは今中間テスト一週間前だとわかっているんだろうか。
「あぁ…気が向いたらな。」
「俺はお前の気が向いたのを今の今まで見たことがないぞ！」
田中はつまらなそうな顔をして、じゃあまた明日、と教室を出ていった。今日は金曜なんだけど。僕はそこで話を切り、またヘッドホンで耳をふさぐ。

耳を塞ぐと、人の意識はその異常に集中する。ヘッドホンは気を

紛らわすために思いついた方法だ。別に耳である必要はないけれど、まぁ見た目的に一番問題がなさそうという理由でそうしている。

ではなんで気を紛らわす必要があるかというと、僕は人の感情が分かりすぎるからだ。喜怒哀楽の感情は、人の顔や行動、口調、オーラに滲み出る。人間は口で嘘をつくことができても、全身で嘘をつくことはできない。色んな雑念が、僕には感じられる。そして大抵それはネガティブな感情。憎悪。悔恨。不満。面倒。嫉妬。絶望。落胆。立腹。憂鬱。殺意。四六時中誰かの愚痴を聞かされている気分になる。どんなに良いことを言っている教師も、友情を語る同級生も、可愛い声を出している女子も、本当はそうじゃない。その心は汚くて、つまらなくて、脆い。人の考えなど、できれば感じたくない。

僕と田中は小学校からの付き合いであるが、そのような考えが伝わってきたことは一度もない。何を考えているかわからないのだ。しかし、本来人付き合いはそれが自然だろう。だからそれでいいんだと、僕は思っている。

ちなみにケーシィというのはもちろんあだ名で、僕が以前から人の心を読んだような発言をすることから、超能力者＝エドガー・ケイシーという発想で中学二年の時に名付けられた。誰が名付けたかは知らないが、きっとそいつはポケモンのやりすぎだ。そもそもケイシーは予言者だろ。

今回はテストのことなど全く考えていなかった田中だが、僕との付き合いはもう４年になる。いつも成績は僕と同じ、いや、僕よりも良かったりする。いったいいつ勉強しているのか？大抵の人間の考えている大抵のことはわかってしまう僕だが、田中だけはよくわからない。もしかしたら田中の頭の中にはスイッチがあって、ＯＮ

／ＯＦＦが自由自在なのかもしれない。

地元の高校に入学してもう1年と2カ月が終わろうとしているが、僕と田中は共に帰宅部だ。人の集まりが苦痛だから、僕は部活には入らない。人間なんて集まれば誰かが誰かのことを好きになるし、誰かが誰かのことを嫌いになる。わざわざそんなものを感じにいくつもりはない。

田中はなぜ部活に入らないのか、まだ理由を聞いたことがない。僕よりも運動はできるし、その明るい人間性のおかげで男女問わず人気がある。運動部だろうと文化部だろうとある程度やっていけるんじゃないだろうかと僕は思うわけだが、まぁ田中にも思うところはあるのだろう。

既に今日も終盤、放課後である。日が沈みかけ、グラウンドは部活動の掛け声で活気に溢れているのだが、ほとんど人がいなくなった教室は静かなものである。もしかしたらこの教室だけ別の世界なんじゃなかろうか、そんな世界に僕一人だけなんじゃないか、そんな気分になって、寂しいもんだな人間なんて…なんてニヒルを気取っているのが僕である。笑うなら笑え。

そんな僕の独壇場に、足音が近づいてきた。カツカツと足音のペースが早い。女子が来る、と僕は直感する。ただ急いでいる男子、とも思えるかもしれないが、間違いなく女子だと僕にはわかる。根拠などない。けれど、その直感が外れたことはもっとない。田中の場合を除く。

その足音は僕のいる教室の前まで来て聞こえなくなった。この教室に用があるのだろうと僕はぼぉーっと考えていたが、その考えが晩飯のメニューの想像をするところまで待っても、教室には誰も入ってこなかった。ちなみに僕が晩飯のメニューを考える時とは、暇であることに暇を感じ始めたときである。…さっさと入ってこいよ。

あまりに暇だった僕は、普通に足音の主を迎えることやめ、非常

にくだらないことではあるが、驚かそうと考えるに至った。ちなみに僕が悪戯を考えるのは、暇であることが罪ではないかと心配になった時である。

まぁ驚かすと言っても大したことはない。ただ扉の前に立っているだけである。ただ、超至近距離で。つまり相手は扉を開けた瞬間に超至近距離で僕と遭遇するわけだ。我ながら、素晴らしくくだらない悪戯だと自負している。

というわけで扉に張り付いて立っていると、外からぶつぶつと声が聞こえてきた。…何と言っているかはよくわからないが、何かに期待している。放課後無人―（今回は僕がいたわけだが）の教室に入ることに何か期待するなんて、パンを咥えて曲がり角で誰かにぶつかるのに期待するのと同じレベルだろ。

がらっと、僕の予測より早く扉が開いた。

「うわわっ！！」

これだけ期待通りに驚かれると、何だか驚いてもらったような気がして逆に達成感を感じない…否、そんなことがどうでも良くなるほど僕が驚かされてしまった。

めちゃくちゃ可愛いじゃん。

超至近距離の僕に驚いて座り込んでいる女の子（女子と呼ぶのは恐れ多い）は、美しい黒髪は肩口くらいの長さで、しっとりというよりはふわっとした感じ、色白の肌に、顔のパーツがきれいに収まっている。それはもう、そのまま美術館に置いとけば金がとれるんじゃないかってレベル。すっげー唇柔らかそう。眼はやや釣り目なのだろが、眉毛との関係か別に恐い印象は与えない。スタイルも健康的だし、身長はそこそこあるし、出るところは出ている。そこらへんの女子に細けりゃいいってもんじゃない、と僕は説教してやりたい。制服も似合っている。この学校に来て良かったと心から思いました。今。

「あの…君、女の子を驚かしといてそれを悠々と見下すなんて、なかなかのＳっ気だね…」

「わざわざその姿勢を変えずにその発言をする君もなかなかのＭっ気だね。」
「あ、わざと座ってるのバレてたんだ…」
なんで初対面でお互いのＳＭの立ち位置について話をしているのかさっぱりわからないが、まぁこんな可愛い子と話ができているのだからいいとしよう。
「ふうん、私のこと可愛いと思ってくれてるんだ。」
「まだそんなことは一言もいってないが…」
「そう？黒髪がどうとか、美術館がどうとか、眉毛の角度とか、スタイルがどうとか、ブレザーのブラウスがエロいとか、私の唇を奪いたいとか言ってた気がしたんだけど」
微妙に内容が歪められている。だいたい合ってるけど。
「奪いたいとは言ってないぞ。」
「舌は入れてあげないよ？」
「普通のキスはしてくれるのか？！」
「きゃーここにセクハラ男子がー」
「棒読みでさらっと酷いこと言ってんじゃねぇ！」
何だこの子……なんだかずっと前から知り合いのような、懐かしい感じがする。
「ところでセクハラ君。」
「不愉快な呼び方するな！」
「そう？女子専用車両にはノーパンノーブラの痴女が必ずいるって信じてる人を上回る存在だと感じてたんだけど。」
「それはＡＶの発想だろ！実際いるとか思ってないから！それに僕そんなハイレベルじゃないから！もっと健全なレベルのＡＶしか知らないから！」
「あ、やっぱりＡＶみてるんだ？男子高校生だね。」
「……不覚！」
なんなんだこの子…会話が常識の斜め上を言ってる。しかも蛇行してる。

「あぁーあ、放課後の教室で素敵な出会いとかないかなぁと思ってたのに、まさかセクハラ君がいるとはなぁー」
「お前は痛い子ちゃんだな。しかも重症な。」
「まぁ君がセクハラ君だろうとパワハラ君だろうとどっちでもいいんだけれど、」
「どっちでもねぇしどっちでもよくねぇよ！まずパワハラはどこから出てきた！」
「今日ここで私とこういう変な会話したっていうのは忘れてね。私はみんなの前じゃ普通の女の子で通ってるんだから。」
唇に人差し指をあてて言う女の子。自分のことを変だと自覚しているらしい。
「じゃあ僕の前でも普通の子でいようぜ。」
「……」
そこで女の子は少し悲しい顔をした—ようには見えなかったかもしれないが、僕にはそれがわかった。
「そうだよね。まぁ気にしないで。」
顔は笑顔だが、実際はそうじゃない。なんて作り笑顔のうまい子なんだ。普通騙される。
「じゃあまた会いましょう。」
そういって女の子はまわれ右をして歩き出した。
「あぁ、待てよ！」
女の子は止まらずにずんずん歩いていく。なんだか逃げているように見える。
「お前と話してて楽しかったぞ！」
聞こえたか聞こえなかったかはわからない。女の子は振り向かずに僕に手を振った。

7月13日　午前11時〜

7月に入ったというだけで、急に夏になった気がする。あ、「急」と「夏」って字の形似てるよね。あぁ、梅雨がずっと続けば雨音が気を紛らわしてくれるのに。

まぁ7月と言えば夏休みなわけだが、毎年僕にとっては暇を持て余す人生の無駄使いの期間でしかない。しかし、今年は何の間違いか田中によって山間部に連行されることになった。キャンプ的なことするんだとか。どうせなら一人でキャンプしたい。僕は寝てたい。ずっと寝てたい。

そして現在僕はホームセンターにいる。ホームセンターは僕のお気に入りの場所だ。特別何かを買うわけではないけれど、生活雑貨を眺めているとそれだけで自分の生活が向上したような気がする。これを使うとあぁなって、こんな風に便利になって…と、わくわくしてくるのだ。それに、まぁお店にとってはいいことではないかもしれないが、人が少ないのもいい。たまにはヘッドホンを外してみたりもする。

「あ、浅井君！」

いや、やっぱりヘッドホンはつけておこう。

「ちょっと…ヘッドホンくらい外してよー。」

また田中だ、と言いたいところだが、残念ながら田中とは聞き間違えようのない可愛い声である。そこに表れたのはすらっと背の高い女子高生。なんでホームセンターにクラスの女子がいるんだよ…！

「ん、あぁ…えっと、中村さん…だっけ？」

「ちょっとー4月にちゃんと自己紹介したじゃん！」

そう言って中村は頬を膨らませた。

知っているよ中村さん。「特技はザ・ワールドです！」なんて言って本当に時を止めたのは君だろ。だけど女の子と話すのなんて慣

れていないシャイボーイなんだよ僕は…。
中村は顔もスタイルも良くて男子からの評判は割と良いが、こんなに近くで顔を見たのは初めてかもしれない。男にはない良い匂いがしてくる…。ファッションに疎いので服装の説明は割愛する。とにかく、センス良く着こなしているのは確かだ。ただ、スカート短くない？脚出し過ぎじゃない？
「人の名前覚えるの苦手でさ…多分クラスの半分くらいまだ顔と名前一致してない。」
「あ、そうなんだ。ねぇ8月さ、田中君と一緒に来るんでしょ？」
さっきまでの憤慨はどこへやら、話を変えられる。
自分の名前覚えられてないこととかどうでもいいのかお前は。
「8月…？山に行くやつ？そうだけど、なんで知ってんの？」
「え？だって私と優希が一緒に行くんだよ？」
僕はもともと表情が豊かではない。田中曰く、ケーシィが笑えば桶屋が儲かる（僕には意味がわからないがきっといいことを言ってる）ほどらしいのだが、それでも僕の顔が凍りついたのが中村にわかったようだ。
「あれ、知らなかった？田中君、『呼ぶならケーシィだな！揺るぎなくケーシィだな！』なーんて言ってたよ？ちなみに優希は田中君のリクエストだから怨むなら田中君をね。」
田中の口調を真似て説明してくれた。全然似てねぇよ。
これは予想外だ。女の子が来るって…しかも2人って…おかしくない？そういうのってリア充のイベントかギャルゲーのイベントじゃない？あ、これゲームの中？
「あぁー…そうなんだ…」
おかしいな、女の子の好感度メーターはどこだ？
「浅井君、何を探しているか全く分からないけど、なんでホームセンターにいるの？」
漫画でしか見たことがないほど見事に首をかしげる中村。
それをお前が訊くか。訊きたいのはこっちだ。なぜ、女子高生が

ホームセンターで掃除機を眺めていた僕の前に表れたのか。今の僕にとっては白いカラスがいるかいないか並に由々しき問題だ。
「あ、いや、家近いから暇潰しに…」
「そうなんだ！私は山行く準備しに来てみました！」
にこやかに宣言された。
僕のこととかどうでもいいのかお前は。人の話を聞け。
「…そんなに準備することなくない？具体的に何するのか知らないけど…」
「浅井君キャンプしたことないの？泊まりなんだよ。と・ま・り。」
盲点。キャンプなんだから泊まりだよねーそうだよねぇー。
女の子と泊まりじゃん！ヤバいじゃん！まじこれエロゲーのイベントじゃね？エロゲーしたことないけど。
それにしても、最近の女子高生のガードってこんなもんなのか…ショットガンにゴミ箱の蓋で立ち向かうようなものじゃないか？
「…いいのかな？仮にも僕たち男だけれど…」
「全然！浅井君顔はいいけど、見るからに奥手っぽいし！ＢＬっぽいし！」
「僕は女の子が好きだよ中村ぁ！」
何か誤解を生みそうなツッコミじゃないかこれ。
まぁある意味信頼されているようだ。男子高校生の性欲をなめすぎな感も否めない。事実僕は君の脚を２２回くらいチラ見してます。
「あ、浅井君何気に私を呼び捨てにしたでしょ？」
「あぁ…ごめん、田中と話してるペースでつい…。」
「いやいいんだけど～じゃあ私浅井君に質問あるから答えてよ。」
かなり近くまで僕に迫ってくる中村。何か底知れぬ恐怖を感じるぞ。女の子恐い。
「…なに？」
「なんで浅井君ってケーシィなの？」
すっげーどうでもいい。僕の恐怖返せ。
ケーシィという名前で僕を呼び、中村と繋がっている男。まぎれ

もなく田中の影響である。田中め…今度購買で焼きそばパンおごってもらうからな…。
「さぁ…？」
「ねぇ浅井君はさ、やっぱりサイコキネシス使えるの？」
使えるわけないだろ。
やはりというべきか、中村はエドガー・ケイシーを知らなかったようだ。

8月2日　午前6時〜

神がいるかなんてよく分からないが、もしいるのだとしたら、きっと神は僕のことが嫌いなんだ。知り合って間もない女の子と一緒に見ず知らずの土地でキャンプとは、一体僕はどれだけ気苦労すればいいんだよ…！

「朝だなケーシィ！」

「そうだな田中…。」

午前6時を朝だと僕は認めない。

始発の鈍行列車のボックス席で向い合って僕と田中は座っている。窓の外は既にうっすら明るい。流れていく田園はなかなかいい景色だが、そんなことより僕は眠いのだ。僕は瞼の裏を見たいんだ。

「今から山に行くってのにテンション低くないか？」

「僕はアメ車なんだ…回転数上げないとパワーが出ないんだよ…。」

なんでわざわざ車のエンジンに例えたのか、自分でも良く分からない。

この旅の道連れである女の子二人組は通路を挟んだ隣のボックス席で爆睡中だ。向かいの席に荷物を置いて、一方が肩に寄り掛り、もう一方がその頭に寄り掛かって、器用に寝ている。中村に優希と呼ばれていた女の子は隣のクラスの神埼優希と言う子だ。おとなしい子で、お嬢様といった感じ…と中村は僕に紹介してきたが、その子はまぎれもなく、あの痛い子ちゃんである。なぜだ、なぜ痛い子ちゃんがここに…なぜ中村の紹介が間違ったことに…。

「言ってることがさっぱり分からないが、ほら見ろ、日の出だ。」

そう言って窓を指さす田中。その先には太陽があるが、それは僕の目に映らなかった。窓に映る反対側のボッスス席、そこには天使、否、女神のような寝顔が2つ。なぜもっと早く気付かなかった…！

「ありがとう田中。」

「なんだ、日の出見たかったのか？」

少し嬉しそうな顔の田中。僕のお礼を素直に喜んでいるようだ。お前は純粋無垢な赤子か。
「ん…まぁ…。」
見たかったのは女の子の寝顔です、とは言えない。それに、僕も眠い。
そもそもなんで始発電車に乗る必要があるんだよ…。
「ところで田中。」
「なんだねケーシィ。」
「おやすみ。」
「おう…ってえぇ?!」
そそくさとヘッドホンを付ける僕。この手際の良さは誉められてもいいんじゃないか。

空は青く、所々に白い雲が漂っている。高原なのだろうか。風が吹き抜け、心地よい。
そこに僕は一人で立っている。周りには山が連なり、緑が美しい。その山々の麓に小さく見える建物。自然の中の人工物を無粋と感じる人もいるだろうが、僕は嫌いじゃない。遠くに来たことを実感させてくれるし、建物だっていい景色じゃないか。聞こえるのは風の音だけ。あぁ、このまま寝てしまいたい。僕は思い切って仰向けに…

「ケーシィーもう着くぞー。」
田中の声の目覚まし時計があったら僕は一日で粉々にしてしまうだろう。憎しみをこめて幾度となく殴り続けるに違いない。まぁそんなことを言っても仕方がないので、僕はヘッドホンと口元に巻いておいたタオルを取る。あ、タオルはよだれ防止のためです。
「なんだ、今からいい夢でも見せてくれるのか?」
僕はこれからの苦労の分も含めて、精一杯の皮肉を込めて田中に言う。
「もう夢見てたじゃん? 幸せそうな顔してたよ〜」

僕の精一杯の皮肉をものの見事に受け流して、田中の代わりに返事をする中村。この前初めて絡んだというのに、もう話し方が馴れ馴れしい。そうだ、ここには中村もいたんだった。さっきの寝顔にはおいしい思いをさせてもらったが、いざこうやって向き合うと妙に緊張する。

いつまでも電車に乗っているわけにもいかないので、僕たちは駅のホームへと降り立った。時計を見ると午前8時35分。田中におやすみを言ったのは6時15分くらいだったから、2時間20分程度寝ていたようだ。それでも眠い。

「ねぇカズ、今からまず何するの？」

耳を疑うが、間違いなく中村から田中に向けられた言葉だ。今「カズ」って呼んだな？田中のことを「カズ」と呼んだな？お前らもう付き合えよ。

「そうだな、まずは泊まるところまで行って、それから…。」

田中と中村ってそこまでの関わりがあっただろうか？そういう人間関係に疎い僕にはさっぱりわからない。

「あの、浅井君…。」

「…！！」

これからの予定を話し合っている2人を遠巻きに眺めていた僕は、思いもよらぬ声に驚いてしまう。傍から見てもビクッとなったように見えたのでは、と心配したが、僕のことを笑っている人はいないようだ。

「あ、あぁ神埼さんか…なに？」

「『神埼さんか…』って、何か残念な感じ…。」

「いや全然！というか声が聞けて嬉しいです！」

気まずさに耐えられなかったのか、痛い子ちゃんから話しかけてきた。何故か下手に出てしまった僕。何やってんだ。

「今まで全然話す機会とかなかったんだけど…初めまして、神埼優希です。よろしくね。」

「あ、浅井啓司です…よろしく、お願いします…。」
礼儀正しく挨拶をされ、僕もとりあえず挨拶を返した。顔は笑顔だが、困惑が僕にははっきりとわかる。間違いなく痛い子ちゃんだ。
「初めまして」って何だよ。
「……」
「……」
妙な間が二人の間に流れる。このままでも居られない。訊くしかないだろう。
「あのさ、初対面じゃないよね？」
「…忘れてって言ったのに。」
多少苛立ちを含んだ返事が返ってきた。やはり痛い子ちゃんだった。今は名前がわかっているのだから神埼と呼ぶべきか。
「君みたいに変わった人のこと忘れたりしな―」
「宏美の前では私は普通の子で通ってるの。普通じゃなきゃいけないの。私は変な子じゃいられないんだよ。だから他の人の前では変な私のことを忘れてて欲しい。」
僕の言葉を遮って、神埼は厳しい口調で言った。5月の時とは全く違う。
「そんなに気にしなくても普通にしてれば…」
「だから普通にしてるんだって！浅井君も普通に私に接して…お願い。」
言葉の最後は懇願になっていた。ふざけたキャラ作りなどではない、必死なものを感じる。神埼にどんな事情があるのかはわからないが、ここは素直に従うことにした。
「…わかった。」
「ありがとう…よろしくね、浅井君。」
やっと心から笑ってくれた。ヤバい。すっげー可愛い。
「ねぇそこの2人～青春するのはそこらへんにして早く行こうよ～」
空気読め中村。

駅からバスに乗り、そのバスから降りて、歩いて30分程だろうか。電柱や街灯もまばらになり自然が増えてくる。結構高い山らしく、草木の切れ間から見える景色は悪くない。
「さすがカズ！いい場所持ってるねぇ～」
「持ってるのは俺じゃなくてじいちゃんだって言ってるだろ宏美。」
はしゃぐ中村と、言われてまんざらでもなさそうな田中。荷物を持たされている僕を置いてずんずん歩いていく。なんで僕の左手さんはこんなにじゃんけん弱いんだよ…。
「ねぇ、浅井君…。」
「え！あ…うん？」
神埼が「普通に」話しかけてきた。5月の時とは全くテンションが違う。こんな風に接されると普通の女の子みたいだなぁ…。それはそうと荷物持ってくれないか。
「別に大したことじゃないんだけど…くしゃみする時に「ペプシコーラ」って言ったら、くしゃみの音上手くごまかせる気がしない？」
前言撤回。やはりこいつは変だ。
「いや、ほら、くしゃみって「へぶしっ」とか「へくしっ」って表現したりするし、何となく近いかなぁと思ったから…」
「説明しなくていいから！それに仮に上手くごまかせても突然ペプシコーラって言ったらそれはそれでおかしいから！」
つい普通につっこんでしまう。神埼が変であればあるほど、僕は楽しくなってくる。それはそうと荷物持ってくれないか。
「なんかこの会話結構変な気がするけど…それはそうと荷―」
「今は2人きりだから。それに浅井君、結局変な私のこと忘れてくれないし。」
中村と田中はいつの間にか見えなくなるほど小さくなっている。
神埼はちょっと目を細めて僕のことを非難してきた。ヤバい、すっげー可愛い。
「普通でいるのって結構疲れるからさ、もうバレちゃってる浅井君の前だけなら変でもいいかなぁーって。浅井君もちょっと変だし。

もしかして嫌？」
　大きく伸びをしながら微妙に失礼なことを言う神埼。その場でくるっと回ったり、ふらふら歩きまわったり、しゃがみ込んでみたり、自由極まりない。一緒にいるだけでこんなに楽しい人間は初めてだ。こんなところでこんな子と出会わせてくれるなんて、もし神がいるなら、神は結構僕のこと好きなんじゃないか。
「まぁいいよ。僕も結構楽しんでるし。それはそうと荷物―」
「そう？ならいいんだけど～。それじゃ私二人を追いかけるからお先～！」
　にこっと音が出るのではないかと思うほどいい笑顔をして、神埼は走って行った。そこに残されたのは疲労困憊の僕と４人分の荷物。
「…これは試練なんだ…神様なりの愛なんだ…」
　次の電柱までって、そんなもんどこにも見当たらねぇよ。

同日　午後7時～

神の試練に耐え抜いた僕が満身創痍で予定の場所までたどり着くと、田中と中村がテントを取ってきたところだった。中村が説明してくれたが、何とここは田中の祖父の経営するキャンプ場なのだそうだ。道具は大方借りることが出来るため、ほとんど準備はいらなかったらしい。恐るべし田中家。…そんなことより僕を労え。

その後は中村曰く「探検」に出かけ、野山を延々と歩き続ける羽目になった。僕たちが通う高校はそこそこ街中にあるから、自然と触れ合う機会は意外と少ない。中村は蛇を今回初めて見たらしく、シマヘビを見つけた時は絶叫していた。神埼も一緒になって恐がっていたが、どうやら本当は興味津々だったようだ。普通の女の子なら恐がるだろうと判断したのだと思う。

僕と田中の家は高校からは遠く、田中は電車通学、僕はバイク（原付ではなく２５０ｃｃ。１６歳になった直後に免許を取り、親と大ゲンカした末に手に入れた）通学だ。僕と田中が通っていた小学校はかなり山中にあり児童数も少なかった（全校で１５人とか）。僕と田中の遊び相手は自然だったと言っていい。山の中にあった滝に打たれて修行ごっこなんてしていたのはアホらしい思い出である。だから今回の「探検」でもあまり驚くようなことはなかったが、田中と昔話で盛り上がり、中々楽しい時間を過ごすことができた。

そして今、僕は草原にあった岩に腰かけ、沈みゆく太陽を眺めながらたそがれている。雲がゆっくりと流れ、空は写真でしか見たことがないような綺麗な夕焼けである。色の名前に「スカイブルー」はあるのに、「夕日レッド」がないのはなぜだろう。この空の色をうまく表現できない自分がもどかしい。

「ねぇ。浅井君。」
「神埼さん…」
いつの間にか神埼が隣に座っていた。膝を抱えるようにして小さくなっている。歩き回って汚れたからと、Tシャツにジャージというラフな格好に着替えているが、これはこれで可愛い。
「さん付けとかしなくてもいいよ？私と浅井君は変人仲間なんだから。ところで、今浅井君が何考えてるかあててあげる。」
にやり、と神埼が笑みを浮かべる。変人仲間という表現は何か引っかかるが、まぁ仲が良いってことだと思っておこう。
「『誰かから足を踏まれるのって、実は幸運なことじゃないか？』」
「それじゃ僕ドMじゃないか！足踏まれたら普通に痛いから！」
「『この痛みが堪らないのだー！』」
「だからMじゃないから！縛られるより縛るほうが好きだから！」
「浅井君…私そういう趣味はちょっと…」
「……不覚！」
僕の真似をしながらとんでもないことを言う神埼。微妙に似てるから困る。
「はは、冗談。私は浅井君が並みの変態じゃないって分かってるよ？」
「ほぉー僕は足を踏まれて喜ぶようなレベルではないと…」
僕ってそんなにレベル高かったんだ、すげー。
「まぁそんなことはどうでもいいんだけど、本当は何考えてたの？」
やっと普通に聞いてくれる神埼。ちょっと物足りない気なんてしてない！してないよ！
「あぁ、いや…昼間、山の中歩きまわっただろ？そしたら小学校の頃のこと思い出して。山の中走り回って、毎日楽しくて…いい思い出なんだ。だけど、去年廃校になっちゃってさ。ちょっと切なくなってたんだよ。」
「ふぅん…小学校かぁ…」
「あの頃は楽しかったなぁ…」

小学校は、僕がみんなと一緒にいることができた唯一の期間。
中学校に入学した時、僕には人の考えが分かる—そのことに、気づいてしまった。

憎い。憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い。

その感情がどこからともなく感じられたのだ。
それは、僕の心を世界から引き剥がすのに十分だった。
それからの僕は、常にみんなから少し離れた存在になった。みんなの心に干渉することが、みんなの心を知ることが、みんなの一挙一動が、とにかく恐かった。僕は、小説の登場人物を辞め、読者であることに徹したのだ。ストーリーに関与しない、ただ、見ているだけの傍観者に。

「浅井君？」
神埼の声ではっと我に帰る。
「…大丈夫？」
そんなに長い時間無言だったわけではないと思うけれど、気付けば僕は汗をかき、眉間に皺をよせ、歯を食いしばっていた。そんな僕の姿が、神埼を心配させてしまったらしい。
「あ、ごめん…大丈夫だよ。」
「……まぁいいけど。」
どうしたの、と言わないのか。
神埼がどこまで考えているのかはわからないが、訊かないでいてくれるのは僕にはありがたかった。ただ黙って、僕を受け入れてくれる、そんな安心感があった。
僕はまだこの問題について考えがまとまっていない。どうすれば

いいのかわからないし、人にどのように話せばいいのかもわからない。そもそも何に困っているわけでもないのだ。むしろ僕のようになりたいと思う人だっているかもしれない。極端な話、ただ気が滅入るだけ。結局、これは僕だけの問題なのだ。他人に話す必要はないし、話したくもない。

それをわかってくれる人は少ない。逆に話さないことに怒りだす人間さえいる。何を隠しているんだ、話してみろ。親切なふりをして、土足で僕の心に踏み込んでこようとする。少なくとも僕の周りにはそういう人間ばかりだった。

だからこそ、訊かないでいてくれる神埼に安心するのかもしれない。

山の端に残る僅かな夕日が、山のシルエットをくっきりと映し出す。

空に残された赤が消えていくのを、僕と神埼はいつまでも見ていた。

同日　午後9時〜

周囲が真っ暗になった頃、田中と中村の元へ戻ると、晩御飯からテントに至るまで準備万端で2人が待ち構えていた。遅かったね、楽しそうで何より…そういう中村の顔に笑顔はなく。僕と神埼はひたすら土下座。爆笑する田中。こんなところ何やってんだか。

結局、後片付けは全て僕がすることになった。神埼は何故か無罪放免。女尊男卑撤廃求む。ただ晩飯（ベタだがカレー）はうまかったので、まぁしょうがない、という気もする。

キャンプ場の炊事場を借りて、しゃかしゃかと鍋を洗う僕。まぁ正直なところ僕は掃除が得意（高校の掃除時間は最も汚い場所に担任が派遣しているほど）なので、特に苦でもないのだけど。

規則的な僕の動きに合わせて、規則的な音を立てる鍋とスポンジ。

しゃかしゃか

しゃかしゃか

…ん？なんだか楽しくなってきたぞ？

「よ、ケーシィ」

ぬっ、と現れる田中。神出鬼没とはお前のことだ。

「俺も洗うぜー飯盒とか洗うの大変だろ？」

田中のこだわりにより、米は何故か飯盒炊飯になった。めんどくさいのに。焦げたら大変なのに。案の定焦しちゃってるし。

「断る。僕は請け負った仕事は完遂する。お前の手は借りぬ。」

僕は田中の手の届かぬところに飯盒を移動させる。ここは譲らねぇ。

「それを断る。俺は言い出したら引かぬ。」

体ごと飯盒まで手を伸ばす田中。田中も譲らない。

しばらくの間、この上なくくだらない洗い物の争奪戦が行われた。こんなことしてないで鍋を洗えば良かったのだろうが、如何せん2

人とも頑固なのである。
約１０分ほど戦ったところで、飯盒を１つだけ田中が洗うということで一応の決着をみた。再びしゃかしゃかと規則的な音が辺りを包む。
「なぁケーシィ」
「なんだね田中」
いつもの会話。なんだかんだ言って、僕と田中の仲なのだ。
「神埼さんってさぁ、俺のこと好きだと思う？」
ぶっと噴き出す僕。何言ってんだこいつ…思春期か？
「…さぁ？」
「そうか、さすがのケーシィでもわからないか。」
いや、わかるけどな。神埼は今現在、誰のことも好きじゃないはずだ。少なくとも僕たち2人のことは好きじゃない。誰かのことを好きになった時は、目に見えてわかる。
「恥ずかしい話なんだけど、俺多分神埼さんのこと好きだ。」
「ベタな展開だな、田中よ」
まぁわかってたけど。中村から神埼が一緒に来るのは田中のリクエストだ、と聞いた時からそんなことだろうとは思っていた。そもそも別のクラスの女子を誘うなんて、それ相応の理由があるに決まっている。
しかしまぁ、そんなことを言うのは野暮なので、僕は気付かなかった振りをするのだ。役者浅井啓司。
「…気づいてた？」
「いや、僕はてっきり中村のこと好きなのかと思ってた。下の名前で呼び合ってたし。」
これはまんざら嘘でもない。中村から先に話を聞いていなかったら、本当に付き合えよ、と思っていただろう。
「宏美とは中学からの縁なんだ…実際ちょっと付き合ってたし。」
がしゃん。おっと僕としたことが手を滑らせてしまったよ。
「ケーシィは別の中学だったから知らないか…中2の時に少しだけ

付き合ってた。だけど俺にとっては彼女って言うより友達だったんだろうな。宏美には悪いけど、すぐ別れちゃったよ。その後しばらく何もなかったんだけど、今年同じクラスになって、また遊んだりしてる。」
「お、おう…そうか…」
役者浅井啓司降板。動揺ばればれである。
「それで、今俺は神埼さんのこと好きなんだよ。」
「ぼ、僕にそれを言ってどうする…」
「いや、一応な。俺とケーシィの仲だし！」
にかっと白い歯を見せる田中。茫然とする僕。
このままだと田中は遠からず神埼に告白するだろう。深読みすれば、これは僕への牽制とも読める。このキャンプに来て、僕と神埼は急速に会話が増えている。それに焦った田中は僕に意味深な言葉をかけ、僕がまごついているうちに神埼に告白してしまう、と。よくできた三角関係じゃないか。小説にできるぞ。
「ケーシィ、今日洗い物のペース遅くないか？俺終わったぞ。」
「あ、ああ、入念にやってるんだよ…」
僕は嘘を吐くのが下手だと、今日わかった。
「じゃあ俺戻るぜ。あとはよろしく！」
さっそうと去っていく田中。
あの田中が、僕を牽制？僕はちょっと発想が汚くないか？田中と僕の仲だからこそ、田中は自分の気持ちを正直に伝えてきただけだろう。そもそも僕が神崎に告白する予定はないのだ。あ、全然問題ないじゃん。
「はぁ…」
肝心なところで人の気持ちがわからない。全く、僕の能力は役立たずである。
ようやく鍋を洗い終わった僕は、田中が置いて行った飯盒に手を伸ばす。
「…はぁ…」

田中、これは洗ったとは言わない。
焦げ付いた米がしっかり残った飯盒が、そこにはあった。

8月3日　午前6時〜

風が良く抜けるからなのか、意外なほどテントの外は涼しい。Tシャツ1枚では肌寒いくらいだ。僕は昨日夕日を見ていた岩に座り、逆の方向を向いて朝日が昇るのを待っている。

昨日の夜、男女4人が一つ屋根で寝るという奇跡のシチュエーションであったにも関わらず、何のイベントも起こらなかった、ということもある意味奇跡だろう。まぁ、昼間に山中を歩きまわった疲れでみんなあっという間に寝てしまった、というのが大きな要因ではあるけど。

そんな平和な就寝であったにも関わらず、なぜ僕がテントの外で朝日を迎えているのか。

それは午前5時のことである。

ドイツのアウトバーンを猛烈な勢いで飛ばしている僕が、事故で盛大に吹き飛んだ。

最初は状況がつかめなかった。しかし、徐々に目が冴え、意識がはっきりしてくると、事故の全貌がわかってくる。

中村の踵落としが、僕の顔面に直撃していた。

中村の声の目覚まし時計があったら、僕は一日で粉々にしてしまうだろう。憎しみを込めて、何度も殴り続けるに違いない。しかしまぁ、そうとばかりも言ってはいられないので、こうやってテントを這い出て、朝日を迎えているというわけだ。なぜ同じ向きで寝ていたはずの中村の踵が僕の顔面にあったのかはよく分からないが、おかげで眠気は全くない。

「僕は意外と低速トルクあるのかもしれないな。」

なぜまた車のエンジンに例えたのか自分でもわからないが、そん

なことを呟く僕。
昨日の日没とは逆に、山の端が徐々に白み始める。
「トルクってなに？」
思わぬ声にビクッとする僕。周りから見てもビクッとなったのが分かったのでは、と心配したが、ここには僕と声の主以外誰もいないのだから心配する必要ないじゃん。
「ふふ、驚きすぎ。おはよう、浅井君。」
「お、おはよう、神埼…」
どうせなら起きてすぐ目に入ったのが中村の踵ではなく神埼の顔なら良かったのに。
「あ、トルクっていうのは回転軸に対する力のモーメントで…」
「んーめんどくさそうだからいいや。」
僕の説明をざっくりと切り捨てる神埼。じゃあ訊くなよ。
「ねぇ浅井君、昨日私たち晩御飯作るのサボっちゃったからさ、今日の朝御飯は、私たちで作ろうよ。」
神埼は朝からにこやかな笑顔で言った。ちょっと寝ぐせでアホ毛が立ってるけど、それはそれで可愛い。
「僕は昨日洗いものを―」
「よし、じゃあ決まりね！」
半ば強引に僕の手を引き、炊事場へと向かう神埼。
僕の周りの女の子は、基本的に僕の話を聞いてくれないらしい。

昨日は鍋を洗っていた場所で、今日は米を洗っている僕。基本的に洗い物は得意な僕であるが、米を洗うのは嫌いだ。だって綺麗にならないんだもの。むしろあんまり綺麗にする必要はないと言われたりする。許せない。僕のプライドがそんなことは許さない…。
「浅井君、お米まだ？」
はいただいま、と返事をする僕にプライドなんて全くなかったと思う。笑うなら笑え。
僕がぐだぐだと米を洗っているうちに、神埼はあっさり味噌汁４人

前の準備を済ませていた。手際いいね、と僕が誉めたら、それは浅井君の手際が悪いだけだよ、と返されてしまった。立場のない僕。
「ねぇ浅井君。」
「なんだね神埼。」
米が炊けるのを待つ間、少し時間ができた。いつの間にか日が昇り、すっかり明るくなっている。
「田中君とは付き合ってるの？」
「付き合ってねぇよ！僕ＢＬじゃないから！」
「あ、間違えた。田中君とは付き合い長いの？」
てへっと舌を出す神埼。か、可愛いけど…！その間違え方はおかしい！
「まぁまぁ長いよ。小学校はずっと一緒だった。中学校は別になったけど、高校でまた一緒になってだらだら続いてる感じかな。」
まぁまさか中学校の間に中村と付き合ってたとは知らなかったが。
「ふぅん、じゃあ田中君のことだったら結構わかる？」
そう言われると微妙だ。知らないことも結構あるし、むしろ感情が読み取れないのは田中だけなのだから。
「まぁ…ある程度は。」
「そっか、じゃあ田中君が誰のこと好きかわかる？」
わかるわけないだろ、と言えない現状が憎い。なんでこのタイミングでこの質問…！！
「さ、さぁ…？」
「はは、浅井君、嘘吐くの下手だね。」
口に手をあてて、軽快に笑う神埼。案の定バレバレである。なんてこった。
「まぁ、別に秘密にされてもいいんだけどさ。実は宏美が田中君のこと好きらしくて。もし宏美のこと好きだったらいいなぁ、みたいな。」
田中、今夏は桶屋が儲かりそうだな。
続々と発覚する新事実。いかん、僕の処理能力が限界を迎えそう

だ。
「そ、そうか、田中もやるなぁ、ははは」
「その分だと別の人が好きなんだね。残念だなぁ宏美…」
情けない浅井啓司。穴があったら入りたい。そのまま埋められたい。あ、やっぱりそれは嫌かも。
「神埼は好きな人とかいるのかよ？」
自分の情けなさを誤魔化すために、神埼に無茶ぶりする僕。より一層情けないぞ浅井啓司。
「私？私は浅井君のこと好きだよ？」
「……」
そういう微妙な言い方されるとマジで困る。それって人として？恋愛対象として？嘘かどうかとか言葉の裏の感情とかは嫌でもわかるのに、またしても肝心なところで役に立たない僕の能力。
「ところで浅井君。」
「なんだい神埼。」
「お米っていつ炊けるの？」
「…！！」
その日の朝食には８割お焦げの御飯が並びました。

同日　午後7時〜

朝食のあと、激怒する中村に僕と神崎は土下座。爆笑する田中。またしても洗いものは僕がしました。

その後はテントの片づけなどをして、山の頂上まで登ってみることになった。そこそこ高い山であるから登るのも結構大変で、頂上にたどり着いた時には既に昼を過ぎてしまっていた。しかし非常に残念なことに、頂上は木が生い茂りすぎて周りが全く見えない、という最悪の事態であった。しかしまぁ、女の子2人は自然の中を歩きまわれたことで十分満足したようで、割とテンションを保ったまま降りてくることができた。

そして、紆余曲折あったこのキャンプも終わりだ。

結局ぐだぐだとやっていたせいで日は傾き、夕闇が訪れつつある時間である。行きと同じく電車に乗り我が家を目指すわけだが、田中はさらに電車で帰らなければならいないし、僕はバイクで帰らなければならない。まぁこればっかりは家の場所に文句を言っても仕方がないので、頑張って帰るしかない。中村は駅から近いので問題ないようだが、神埼はどうするのだろう。

「なぁケーシィ。」

「どうした田中。」

田中の呼びかけに元気がない。このキャンプで疲れているのだろう。考えてみれば、計画も準備も田中がしてくれたわけだし、感謝しなきゃいけないな。

「楽しかったか？」

「もちろんだ。ありがとう田中。」

嘘でもお世辞でもない。ずっと寝てたい、いい夢を見せてくれるのか、なんて言ってた僕だが、実際いい夢でも見てたんじゃないか、と思えるくらい楽しんだ。中村、神埼と関わりを持てたことも大き

い。僕一人じゃあ、人間関係を広げようなんて思わないだろうし。
「そうか。それは良かった。」
今回は来る時と違って電車の中は結構人が多く、ボックス席に4人で座っている。僕と田中が向かい合って座り、田中の隣に中村、僕の隣に神埼がそれぞれ座っている。女の子2人は行きと同じく爆睡中であるが。
「田中、寝てていいぞ。僕が起きてるから。どこで降りればいいか僕でもわかるし。」
「そうか。悪いな。ケーシィも疲れてるのに。」
「田中ほどじゃない。心配しないで寝てろ。」
程なくして、田中も夢の世界へと旅立った。僕は窓枠に頬杖をついて、窓の外へと目をやる。日は沈み、夕闇が辺りを完全に包んでいた。街明かりがぼんやりと浮かび、街灯が流れていく。夕日もそうだが、乗り物から見る夜景も妙に切ない。
「ん？神崎…？」
神埼が僕を突ついた…気がしたが、そうではなく、神埼が僕のほうに寄り掛かってきたようだ。神埼の頭と僕の肩の位置はちょうど良いようで、神埼の頭は妙に安定している。
「…まぁいいか…」
再び窓の外に目をやる。後1時間ほど、幸せな時間が過ごせそうである。

目的の駅が近づいてきたところで、ちょうど良く神埼が目覚めた。
「うわ、浅井君、私を襲ったな？」
寝起きでも絶好調である。
「襲わないから。仮に襲うならこんな中途半端なところでやめないから。」
「浅井君、そんな願望があるだなんて…」
「…不覚。」
エクスクラメーションマークと三点リーダを一つつけていないが、

決して機嫌が悪いわけではない。まだ田中と中村が寝ているから静かにしているだけだ。どうせ起こさなければいけないわけだが。
「おい、たな…。」
田中を起こそうとしてふと思いとどまる。確か田中は神埼のことが好きだったと言っていた。ということは起こす前にやっておかなければいけないことがある。
「神埼。」
「ん？なに？」
「僕の肩から離れろ。」
神崎にとって、僕の肩は相当具合がいいらしい。

田中と中村を起こし、僕たちは駅のホームへと降り立った。この辺りは割と街中であるものの、あくまで地方都市。夜になれば辺りは予想以上に暗くなる。
「それじゃあ、みんな集まってくれてありがとな。」
田中が代表して一言。できた男である。それぞれ田中への感謝を述べ、解散ということになった。また夏休み明けに、と手を振る。
田中は自分の電車に乗る前に、中村を送って行くらしい。中村は一度断わったが、結局同意した。田中…罪な男。
そして僕は駐輪場に止めておいたバイクに来た時と同じように荷物を縛り付ける。以前一人旅をした時からつけっぱなしのサイドバッグも一応あるのだが、それに積み替えるのはさすがにめんどくさい。最近のバイクの積載性のなさはどうにかならないのか…。
「ねぇ浅井君。」
今度はもう驚かないぞ。三度目の神埼である。神崎が駐輪場に来るとは、まさか自転車で来たのだろうか。
「神埼は自転車？てっきり迎えが来るのかと思ってたけど…。」
「ううん、来る時は歩いてきたし、迎えも来ないよ。」
神埼の家はここから近いのだろうか。男と違って女の子の泊まりの荷物となれば、そこそこ量はあるはずである。

「神崎の家はここから近いの？」
「ううん、陸橋の近く。」
この町で陸橋があるところは一か所しかない。
めちゃくちゃ遠いじゃん。来る時歩いてきたの？朝何時起きだよ。今から歩いて帰るの？物騒ってレベルじゃねぇぞ。
「そ、それはやめたほうが良くない？疲れてるだろうしさ、暗くて危ないし…」
「うーん、だけどタクシーに乗るお金はないしなぁ。」
僕のことを見つめる神埼。こいつ、眼力すごいな…。恋に落ちるぞ。
「な、なにかご用ですか…？」
またしても下手にでてしまった。何やってんだ僕は。
「いや、後ろに乗せてくれないかな、と思って。」
そういえば8月で免許取って1年になるなぁ。

神埼にはそのまま待ってもらい、深夜まで開いている大型量販店（幸い近場）まで行ってヘルメットを買ってきた。なんで僕は人のヘルメットのために有り金はたいてるんだか…。その後僕の荷物と神埼の荷物をサイドバッグに振り分けて、いざ出発である。
「神埼は運がいいな。もし僕がサイドバッグ外してたら、タンデムできなかったぞ？」
「サイドバッグ？タンデム？良く分からないけど、私が運がいいってことは分かった！」
もうお前が幸せそうでなによりだよ。全く。
「じゃあここのステップに足を乗せて、落ちないようにシートについてる紐をちゃんと…」
わざわざこっちが乗り方を説明しているというのに、それを聞き終わるより先に神埼は自分の体を固定していた…僕の背中に。
「あれ違う？なんかこんなイメージなんだけど。」
僕の腰に手をまわし、すっかり落ち着いている神埼。あの、胸あ

たってます。ベタな展開。
「いや、しっかりつかまれよ。」
キリッ。僕はイグニッションをＯＮにし、セルスターターを押す。もちろんエンジンがかかるんだけど、この感じがいちいち好きだ。…妙な目で見るんじゃねぇよ。
「あ、エンジンかかった！へぇ結構静かなんだね。」
世間のバイクへのイメージは爆音マフラーのせいかやかましいのが普通のようだ。早く取り締まりで捕まっちまえ。
「マフラーが純正だし、まだアイドリングだから。回転数上げればそこそこ音は出るよ。」
「マフラー？アイドリング？良く分からないけど、これから凄くなるのは分かった！」
うん、良く分かってるよ神埼。僕はバイクの説明を諦めて走り出す。
後ろで神埼がはしゃいでいるのがわかる。アクセルを開き、さらに加速する。

約１５分ほど走って、神埼の家までたどり着いた。大体６０ｋｍ／ｈで走ったとすれば、駅から１５ｋｍは離れていることになる。実際はもう少しゆっくり走ったからもう少し短い距離なのだろうが、だからと言って１０ｋｍほどの道のりを神埼は歩いて来たという事実に変わりはない。しかも早朝に。
「ありがとー助かったよ～、また歩いて帰るのかなぁって思ってたから。」
思うなよ。さらっと言うなよ。
「役に立てたなら良かったけど…家の人迎えに来てくれたりとかはしてくれないの？」
神埼の家はお世辞でも何でもなく、立派な家だった。電気も点いているし、留守なわけでも、既に寝てしまっているわけでもないように見える。駐車場には普通車が2台駐車されている。その横にひ

っそりと置かれている自転車（おそらく神埼が使っているものだろう）だけが妙に家の雰囲気にそぐわない気がした。
「あぁー、なんていうか、放任主義なの、うちは。お父さんもお母さんも何もしてくれない代わりに、私は好きなことさせてもらってるの。だから気にしないで。」
神埼は僕に笑顔を見せる。普通ならば、何の問題もない、両者が納得している家庭なんだと判断するかもしれない。でも僕には、その裏の寂しさがはっきりと感じとれる。
「…ご両親と何かあったのか？」
「…別に…何でそんなこと訊くの？」
明らかに渋い顔をする神埼。
踏み込んではいけない領域だとわかっていたのに、わざわざ踏み込んでしまった。結局僕も、僕の心に踏み込んでくるやつらと大した違いはないのだと、自己嫌悪になる。
「いや、何となく…」
「何となくでそんなこと訊かないでよ…！！」
僕のことを睨みつける神埼。僕にはそれを見返すことしかできない。神埼の目には、うっすらと涙が浮かんでいる。
「…浅井君は鋭いね…私、結構上手く笑顔作ってたと思うよ？でもそうやって見透かしちゃって…分かってたんでしょ…？なのにかける言葉はそれ…？」
「……」
返す言葉がない。
神埼の笑顔の裏まで深読みして、神崎にとって辛い話題であろうとことはわかっていたのだ。にも関わらず、無神経にその話題に食いついた。自分の愚かさに吐き気がする。
「ごめん…僕が勝手に踏み込んでいい話題じゃなかった…ごめん。」
謝ることしかできない僕。結局、僕は無力で、どうしようもない、役立たずでしかない。
「…そうじゃなくて…！！」

神崎が苛立ちのこもった声をあげる。…そうじゃない？僕はよくわからなくなる。
はぁ、と息を整えながら、神埼は言う。
「…浅井君は肝心なところで鈍いね。私が何言いたいかわからない？」
「……」
神埼は僕の顔を両手でつかむと無理やり自分の顔へと向かせた。
神埼の顔がぐっと近づく。
「『何となく』でそんなこと訊かないでって言ってるの…！！」
嫌でも僕と神埼の目があう。神埼の瞳から涙が零れる。
その時、神埼の目からふっと怒りの色が消えていくのが分かった。
「ごめん、浅井君、私やりすぎだね…。」
僕の頭を掴んだまま、神埼は続ける。
「浅井君、私は浅井君から何を訊かれてもいいと思ってるよ。家族のことだって、全然平気。それくらい浅井君のこと信じてる。だけど、『何となく』なんかで私の心に踏み込んでくるのは許せない…これだけはわかって。」
この2日間で、僕と神埼は急激に距離を縮めたと思う。だがそれは同時にお互いの信頼を深めるということでもあった。仲が良いからこそ、相手に対して真剣に向き合う必要がある。親しき仲にも礼儀ありとは、古人もなかなかいいことを言う。
にも関わらず、僕は神埼の信頼に応えなかった。「何となく」で神埼の心に踏み込んだ。神埼とちゃんと向き合っていなかったのだ。
「…わかっ…」
「それなら。」
僕の言葉を遮って、神埼は言う。
「私の言うこと一つ聞いてよ。」
「……」
神埼の手はしっかりと僕の顔を掴んだままだ。お世辞にも格好いいとは言えない。

「私とキスしなさい。」
神埼を傷つけ、泣かせ、キス…いやおかしくない？その流れはおかしくない？そもそも僕と神埼は付き合ってたっけ？
「…えぇ…」
ぽかーんと間抜けな顔を晒している僕。
神埼がじっと僕の目を見つめている。この眼力はヤバい。恋に落ちました。
「もう、浅井君チキンだね！」
ぐいっと顔を無理やり引き寄せられる。そこから先は何も言うまい。

いったいどれくらいの時間だったのかよくわからないが、神埼はようやく僕の頭を解放してくれた。2秒だったのかもしれないし、2時間だったのかもしれない。…2時間はないか。
「神埼。」
「なんだね浅井君。」
微妙に僕の真似をする神埼。だから似てるって。
「神埼は好きでもない相手とキスする人じゃないよな？」
無粋とはお前のことだ。答えの分かりきった質問をする、無様な男の姿がそこにはあった。
「…？私ちゃんと浅井君のこと好きって言いましたけど。」
やばい、好きってはっきり言われるとめちゃくちゃ照れる。
しかし、そんなことといつ言われただろうか。今日は電車で帰ってきて、その前に山に登り、その前に朝御飯を作り、その前に米を焦がし…あぁ。
「た、確かに言ってますね…」
「もしかして覚えてなかったの？それちょっとひどくない？」
ひどいですひどいと思います。もう救いようのない愚かさだと思います。
「まぁいいけど～。ところで浅井君、それに対して浅井君の返事は

？」
「へ、返事…？」
わかってますわかっていますよ。普通返事をするもんですよね。
「まさか舌まで入れといて変な答え言ったりしないよね。」
「はっきり言うなよ！誰も聞いてなくても恥ずかしいわ！」
神埼は僕と違って確信犯なので、周りに人がいないのは間違いないのだが、なんだろう、この恥ずかしさ…。今まで告白したこともされたこともないしな…。でも、神埼とより深い仲になれるなら、これくらいのこと何でもないような気もしてくる。

「神埼、一つ約束をしよう。」
「ん？なに？」
「お互いに、ありのままで接しよう。誤魔化したり、隠したりするのはなしで。」
「…はは、浅井君らしいね。分かった。約束します。」
神埼が笑顔になった。この笑顔が、これからどれだけ僕を幸せにするのだろう。僕の前途は意外と明るいかもしれない。

「それじゃあ、また用があったら呼んでくれ。」
僕は再びバイクに跨りながら神崎に向けて言う。
「…ほえ？」
「お前の送り迎えは僕がする。他のやつには譲らない。」
イグニッションＯＮ。セルスターターを押す。
「…あ、浅井君、アッシー君だね。」
お前はまだバブル時代なのか。自分の彼氏をアッシー君だねって。どうも神埼が相手だと締まらないなぁ。まぁそれでもいいか。
「あ、浅井君！」
神埼の声に無言で手を振り、走り出す僕。
「まだメルアド交換してなくない？」
ぷすん、とエンストする僕の愛車。

お互いの連絡先も知らないまま付き合い始めた男女の姿が、そこにはあった。

9月21日　午前7時～

夏休みは本当に1カ月以上もあったのだろうか。始まる時はあんなに長かったのに、終わってみればこんなものか。まぁ8月の後半は補習授業だったから実質もう少し短かったわけだけど。

「あ、浅井君今日も時間通りだね。おはよう。」

家の扉から神崎が出てきた。いつものことなのだが、神埼はまるで自分の家から出てくるとは思えない、恐る恐ると言った様子で現れる。いつかちゃんと話すから、ということなので、今は深く聞かないでいる。

「おはよう、神埼。今日は一段と寝ぐせが激しいな。」

「いいの、どうせヘルメット被るし。」

そういって荷物をサイドバッグに押し込み、僕の後ろに神埼が座る。

「さぁいけメッシー！」

「そこはメッシーじゃないから！一応言うけどアッシーでもないから！」

付き合い始めて1カ月が過ぎた。宣言通り、神埼の送り迎えは全て僕が請け負っている。もともと神埼は自転車通学であるから基本的に僕の送り迎えは必要なかったのだが、8月の補習が始まった頃に神埼の自転車は盗難にあってしまった。あんなボロボロなやつ盗んでどうするんだろうね、と神埼は笑っていたが、実際はかなりショックだったようだ。自転車を買いなおす余裕はないらしく、それ以来僕が送り迎えしている。神埼の家を見る限り、自転車1台くらいを買う余裕はあるように思えるのだが、そこは神埼と両親との問題なのだろう。時が来るまで、僕は踏み込まずにいる。

朝礼は8時からなのでこんなに早く家を出る必要はないが、通勤ラッシュにつかまりたくないのと、みんなに見られたくないから、

という理由でこんな時間に登校している。さらに学校から少し離れたところで神埼は降りるという念の押しようだ。まぁこれは、僕の前以外では普通の子でいたいという神埼なりの考えに則っているのであるけど。
「それじゃあ、また帰る時に声かけてくれよ。教室でぼーっとしてるから。」
「浅井君も飽きないね。じゃあまた帰りに。」
そう言って手を振る神埼に僕も手を振り返し、学校の駐輪場までバイクを走らせる。神崎が降りると、妙に背中が寂しい。今までこれが当たり前だったのに、慣れって怖いなぁ。でも神埼に慣れる日はいつまでも来ない気がする。

教室に入る頃には、7時30分になっていた。とは言っても、教室には一番乗りである。入学してから今に至るまで、僕は必ず無人の教室に登校してきた。が、それも今日で終わりのようだ。教室の中から妙な気配を感じる。僕は教室の扉の前で立ち尽くしてしまう。おかしい。今までこの時間は誰もいなかったはず。どうしよう…教室に入る以外に選択肢はないわけだが。
「…ぬん！」
意を決し扉を開く僕。妙にやる気のこもった声出しちゃったよ。
「ぬわぁ！！」
扉の反対側で驚きの声を上げる謎の人物。大体こういうの名探偵コナンだったら黒の全身タイツの人だよね。
「……」
無言でその人物の横をすり抜ける僕。今月の席替えでも最後列を確保できた。じゃんけんは弱いのにくじ運は強いのだから世の中よくわからない。
「え、無視はやめようぜ？！マジで凹むから！」
はぁ、と僕は息を吐く。今日も平穏な一日の始まりのはずだったのに…。

「で、お前何やってんの？」
僕はもはや情けで質問をする。何で朝っぱらからこんなことしてるんだか。
「妙に眠れなかったから始発で来た！そして足音がしたから驚かしたくなった！」
僕はお前と思考が同じなのか…！！何だか凄くショックだ…。
「あれ、なんでケーシィが落ち込んでんの？失敗したの俺だぜ？」
「…何も聞くな…」
「そうか、じゃあ聞かない！」
こいつがこんな性格で良かった。もしここで問い詰められたら、僕はもう立ち直れない。
というわけで、僕の連続一番乗り記録は今日で終了となった。そしてその原因は、何を隠そう田中である。なんだか妙に悲しい。
「で、お前が眠れないなんて一大事だな。普段のお前なら例え今まさに電車がやってくる線路の上でも寝ていられるイメージなんだが。」
「俺は命よりも睡眠を選ぶというのか！逞しいな！」
相変わらず朝からテンションが高い田中。田中で発電ができるようになれば地球のエネルギー問題はあっさり解決するだろうに。
「で、なんで？」
「あ、いや、えっと…」
口ごもる田中。何でもかんでも清々しいほどに言いきる田中にしては珍しい。
「べ、別に大した理由はないさ！何となく眠れない日があったっていいだろ？」
相変わらず奥歯に何か挟まったような様子の田中。
なんだかすっきりしないが、本人がそう言うのだから仕方がない。
「まぁ…なら…いい…け…ど…」
「ん？どうしたケーシィ？」
僕の体が小刻みに震えだした。

この感じ、この吐き気のするような、重く、苦い感じ。どこかで…。
「ケーシィ？」
そして、間違いなく田中のほうから漂ってくる、この影のある感じ…。
憎い。憎い。憎い。
「……うぅ、うわぁ！！」
「どうしたケーシィ？！」
田中が寄ってきた。僕の体を支えようと手を伸ばしてくる。
「来るな！来るな！！」
僕はその手を振り払い、田中を突き飛ばす。僕は這うようにして廊下へと転がり出る。壁に手をつき、息を整える。
田中が？田中が？僕のことを憎いって？なんで？僕が何かしたか？意味がわからない。
「おいケーシィ！何すんだよ！」
教室の中から田中が叫ぶ。何を言ってやがる。僕のことを憎いと思っておきながら。
「黙れ！お前のことはわかるぞ…よくもまぁそんな顔ができるな…」
「おい…何言ってるんだよ…」
教室からこちらへと歩いてくる田中。突き飛ばした時に打ったのか、頭を押さえている。
「来るな…僕に近寄るな…」
「どうしたんだよケーシィ…俺が何かしたか？」
困惑顔の田中。その顔に騙されはしない。僕には全てがわかる。
「…じゃあ言ってやるよ。お前は僕のことが憎い！憎いんだろ！！」
「…浅井君…何をしているの…？」

田中ではない声に、ふと我に帰る。
「浅井君は汗だくで田中君を睨んでるし、田中君は頭を押さえて浅井君に迫ってるし…少なくとも朝の学校で見られる情景じゃないよね…？」
「神埼…これは…」
さっきバイクから降ろした神崎が、もう学校まで来てしまった。
何と説明すれば良いのだろう。田中が僕を憎んでいる？そんなこと神崎に話しても分かるわけがない。僕にしか分からないことなのだから。どうすればいい…。
「おはよう神埼さん。いやちょっと小学校の頃の話してたらケーシィ怒っちゃってさー今なだめてるところなんだよ。」
唐突に神埼に説明を始める田中。
「何言ってんだお前…」
田中が僕を庇う？何のために？僕のことが憎いのに？
「まさかあの話でお前がここまで怒るとは…すまなかった！許してくれ！」
大げさに手を合わせ、頭を下げる田中。何やってんだよお前。意味わかんねぇよ。
「…浅井君…」
僕のことを見る神埼。明らかに怯えている。とにかく今は、この場を収めるしかない。そうか、田中はとっくにそんなことわかっていて、嘘を言っているのか。
「…次は許さないぞ、田中。」
やっと頭が冷静になってきたのか、やっとそれらしい言葉を吐くことができた。

それから間もなく、ぞろぞろと教室に生徒がやって来始めた。あと少し神埼の登場が遅かったら、僕たちの喧騒をみんなに見られていただろう。
「よう、南！なぁ、昨日のNステなんだけどよ！え？見てない？！

ないわーそれはないわー」
田中は何事もなかったかのようにみんなに声をかけている。どんな時でも、田中はクラスの人気者である。打って変わって僕は、廊下につっ立ってそれを眺めているだけだ。
「…浅井君。」
いつの間にか隣に神埼が立っていた。放課後以外の時間に、２人並んで立つのは初めてかもしれない。ただそんなシチュエーションを喜ぶ余裕は今の僕はない。
返事をする気力もなかった。僕は顔を向けて聞いていることを示す。
「今日は居残りせずに帰りなよ。」
それだけ言って、自分の教室へと戻って行った。
始めて会った時のように、速足で。

同日　午後7時〜

僕の高校は何時が完全下校なのだろう。よくわからないが、まだ僕は教室にいた。椅子に逆に座り、背もたれに顎を乗せてぼんやりしている。太陽は沈む前に最後の輝きを見せ、熱した鉄のように赤い。強烈な西日が射し込む教室で、夕日を見ながら僕は無意識に一日を振り返っていた。何をしているんだか、僕は…今日は今まで生きていた中でも、最悪の日かもしれないのに。

ヘッドホンからは珍しく、音楽が流れている。いつもは耳栓代わりにしか使われていないこのヘッドホンが、本来の使われ方をされている。

「……」

不思議だ。今までもいつもこうやって一人で放課後を過ごしていたはずだ。それはそれでいいと思っていたはずだ。なのに今日は、妙に虚しい。

「…神埼…」

来るはずもない神埼を呼んでみる。僕に早く帰れと言ったのだから、今日は僕のバイクで帰る気はないということだ。今頃自分の家に向けて歩いていることだろう。あの長く、寂しい道を。

「にゃー！」

「うおぉ？！」

不意に後ろから抱きつかれた。

「呼んだ？」

四度目の神埼。どんなに驚かされてもめったなことでは驚きが周囲にばれない僕であるが、今回ばかりはきっとバレバレだ。声まで出してしまったのは初めてかもしれない。

「隙あり浅井啓司…あれ？音がでてる？」

神埼は僕にひっついたまま、僕の頭からヘッドホンを外すと、そ

れを自分の頭へと着ける。僕は為されるがままだ。あの、胸があたってます。
「クラシック…？よく知らないけど、いい曲だね。」
背後を取られているため神埼の表情は窺えないが、声から察すると機嫌は悪くないようだ。
「姉さんから押し付けられてるんだ。僕の人格更生用らしい。」
「あれ、浅井君お姉さんいるの？」
そんなに耳の近くで話したら息がかかるって…！
そういえば僕の家族について神崎に話したことはないかもしれない。だが話してもあまり面白くはないだろう。はっきり言って、普通の家族である。
「ところで、神埼…」
僕は後ろの神崎に向けて話しかける。
「ん？なに？」
「なんでいるんだ。」
一瞬の沈黙の後に、神埼はと答えた。
「浅井君は教室にいると思ったから。浅井君は帰れって言われて素直に帰るような人じゃないしね。」
それに、と神埼は続ける。
「歩いて帰るのはちょっときついかなぁと思って。」
神埼はさらっと答える。も、もしやこれがツンデレ？

神埼は僕から離れて立ちあがり、ヘッドホンを僕の頭に戻すと、僕の正面の椅子の向きを変えてそれに座った。離れられてしまうと背中が寂しい。
「で、浅井君はなにしてたの？」
「あ、いや…ちょっと考え事を…」
実際どうでもいいことをたくさん考えてしまった。なぜ田中は僕のことを憎んでいるのか、僕はどうすればいいのか。僕と田中の仲はこれで終わりなのか…。田中のことも、神崎のことも、考えるだ

け考えた。結局答えなど出ていないけど。
「何だっていいだろ…大したことじゃない。」
「はい、浅井君約束を破りました。私怒ります。」
突然怒る宣言をされた。唐突すぎて僕の頭がついて行かない。
「浅井君、『お互いに、ありのままで接しよう。誤魔化したり、隠したりするのはなしで。』なーんて言いきったのはどこの誰だったかな？」
神埼は実は僕の心が読めるんじゃないだろうか。的確に僕の痛いところを突いてくる。
「……」
返す言葉がない。神埼と目があったまま動けない。相変わらずとてつもない眼力だ。
「浅井君、私は隠し事全てを否定するつもりはないよ。生きてれば秘密なんていくらでもできるし。だけど今回はさ、ちょっと違うでしょ。私にも知る権利がある。」
「なんで権利があるんだよ。」
もう子どもが駄々をこねるのに近い。苦し紛れに言った言葉だ。
「私が田中君の友達で―」
神埼はそこでちょっと言い淀んで、ずっと見ていた僕から視線を外した。
「あなたの…彼女だから…」
がらがらと崩れ落ちる僕の心の壁。
死にました。浅井啓司、ハートを射抜かれて死にしました。

「ごめんなさい。」
生まれ変わった浅井啓司は、開口一番、神崎に謝罪した。
「わかればよろしい。」
目を逸らしたまま胸を張る神埼。やっぱ出るところ出てるなこいつ。
「なんで僕を謝らせておきながら目を逸らしてんの？」

「え、いや…さっきのやつ、ちょっと恥ずかしかったから…」
今まで散々僕を照れさせておきながら、ここで恥ずかしがるのかよ！
「今までだって似たようなこと言ってたじゃん。」
「いや、だって…今まではちょっと冗談っぽく言ってたし…」
立場逆転。攻守交替。バッター、浅井啓司。
「ほぉ、じゃあ今までのあんなことやこんなことも全部冗談半分だと。」
「いやそうじゃないけど！本気だけど…！」
「そんなこと言われてもなぁ、恥ずかしがってるの見るの初めてだし。」
「恥ずかしがってなくても本気だったんだよ！」
「じゃあ恥ずかしがりながら言うところも見てみたいなぁ。」
「…何を言えばいいの？」
「『私？私は浅井君のこと好きだよ？』（『8月3日　午前6時～』参照）ってやつ。」
「私？！…私は…浅井君のこと…好きだよ…？」
「『私とキスしなさい。』（『同日　午後7時～』参照）。」
「わ、私と…キス…しなさい…」
「喜んで！！」
バッター浅井啓司、空振り三振ー！！かなり粘りましたが、最後は力尽きました！
「馬鹿！！」
神埼の鉄拳制裁。僕の右頬は早くも紅葉が始まった。自業自得である。
「ごめんなさい…」
「……」
神崎の顔も紅葉が始まったようだ。ヤバい。めっちゃ可愛い。
「もうしばらく言ってあげないから。」
「はい、すいません。」

「って、そんなことどうでも良くて、私は―」

何の前触れもなく、教室のスピーカーからトロイメライが流れ始めた。誰もいない教室では意外なほど音が響く。

「これって…」

神埼の顔に動揺の色が見える。

「ははは…下校時間の合図だね。」

僕の高校では、このトロイメライの後に警備員のおじさんがやってきて生徒を追い出していく。このおじさんかなりお喋りらしく、カップルが教室の残っていようものなら次の日には学校中で噂になっている。

「ちょっと！時間なくなっちゃったじゃん！」

珍しく焦る神埼。これまでの経験でわかったことだが、神埼は中途半端な状況が大嫌いなのだ。このまま放っておくと、手のつけられないことになる。

「あ、えっと…あ、そうだ、神埼は門限何時？」

「え…うちには門限なんてないよ…」

そうだった。神崎家の問題については、おいおい触れていこうと思う。だが今回は好都合。それならしばらく大丈夫だ。

「な、ならさ、今日うちで話の続きしない？」

「えっ…是非。」

神埼、お前僕の家に来たかったのか。

９月２１日。その日は初めて母と姉以外の異性が僕の部屋に入った記念すべき日となった。

同日　午後8時～

「面白くない。」
神埼はつまらなそうにして、口を尖らせる。
「エロ本も、ＡＶも、グラビア雑誌も、同人誌もないなんて、男としておかしい！」

数分前、学校を出た神埼と僕はバイクに乗りまっすぐ我が家へと向かった。
僕が我が家の扉を開くと、ちょうど居間から姉が出てきたところだった。姉はジャージのハーフパンツにＴシャツという適当な格好で、風呂上がりなのか首にタオルを巻き、サイダーの缶を持っている。おかしいな、近所では美人で評判の姉のはずなのだが。
「あ、啓司おかえり。『ただいま』くらい言いなさいよー…その子は…？」
姉は僕の後ろにいる神埼を見て一瞬動きを止めた。僕が今まで男友達を連れて来た時とは明らかに違う反応である。
「あぁ、この子は…」
「神崎優希です。浅井君とは高校で仲良くさせてもらっています。よろしくお願いします。」
神崎が僕の紹介よりも早く自己紹介をした。本当、僕の前以外では良くできた普通の優等生なのだから驚きである。
「……」
ぽかーん、という言葉そのままのような顔をして立ちつくしている姉。
「姉さん、何つっ立ってんだよ？」
姉のそこからの表情の変化はスローで見たいくらいだった。目を見開き、血相を変えて、驚愕の表情を構築していく。
「母さん！啓司が女の子連れて来た！しかもめっちゃ可愛い子！」

キッチンに走り去って行く姉。
それからは母まで巻き込んで大騒ぎだった。母は神埼の写真を撮ろうとするし、姉は神崎を質問攻めにするし…。まぁ確かに僕が女の子を連れてくるなんてことは今までなかったけれど、そこまで驚かなくてもいいじゃないか。僕は多少なり傷ついたぞ。
とりあえず神崎を僕の部屋へと避難させ、僕は騒動を収めるため居間へと戻った。姉と母は僕に「あの子誰？！」を合計で３０回は言ったと思う。僕は「ただの友達だから！」を２０回くらい言ったと思う。なぜ僕のほうが少ないかと言えば、何回か質問を無視したからである。苦労を察してほしい。
そして疲労困憊の僕が部屋へと戻ってきた時、神埼はちょうど僕の部屋の探索を終えたところだった、というわけだ。

「いや、別に男って必ずそういうの持ってるわけじゃないよ？」
僕はベッドに座り、そっぽを向いている神埼に向けて言う。まぁ別にそういうものに興味がないわけではないが、それにお金をかける気にはなれない。何と言うか、そういうものを買っている自分を想像すると勇気が出ない。チキンでごめんなさい。
「嘘だ！私の情報が正しければそれは嘘だ！」
「その情報のソースはどこ？」
「宏美！」
ダメだ…偏見の塊だ…。
「あーあ。せっかく浅井君の趣味通りの格好してあげようと思ったのに…」
な、なんだって…。それって、どこまで？どこまでしてくれるんですか！
「え！なら買ってくるから待ってて！」
「嘘です！馬鹿！」
神埼の鉄拳制裁。なんで僕は自分の部屋で女の子に殴られてるんだろう。

というわけで、そろそろ本題へと戻る。

僕は学習机の椅子に座る。放課後教室に居残るようになってから、この椅子はしばらく使っていない。ねぇ浅井君、と神埼が尋ねてくる。

「今日放課後ずっと教室にいたのは考え事してたからだったよね？どんなこと？」

神埼の貫くような視線が僕に向けられた。この目を向けられたら、人の目を見て話せない僕でも神埼の目から視線を外せなくなる。

「色々考えてたよ…」

放課後の教室は落ち着く。世界から隔離されたような感じで、一人になった気がする。

「…田中君のこと？」

神埼は鋭く僕の考えを予想してきた。田中のことを話すのであれば、僕の問題のことも話さなければいけない。それは僕にとって、恐れていることでもある。人の気持ちがわかる、なんていう奴は大抵詐欺師か怪しい宗教の人の言葉である。僕もそんなふうに思われるのではないか、そんな恐れが、いつも僕の口を塞ぐ。

「そう…田中のこと。」

「どんなこと？」

でも僕は神埼を信じている。神崎も僕のことを信じている。

「神埼…人の気持ちって分かると思う？」

「…？急にどうしたの？」

「僕には、わかる。もちろん細かく考えが分かるわけじゃないんだけど、なんとなくわかる。この人は嘘をついてるとか、言葉の裏に隠された感情とか、そういうのが。」

「……」

神埼は黙って僕から目を逸らす。人の気持ちがわかる？ちょっとおかしいんじゃないか。そう思って当然だ。神崎も、僕の告白に戸惑っているに違いない。

「そうか、そういうことなんだ。なるほどね。」
驚きよりも、納得という表情を見せる神埼。
「…なんか意外な反応だな。」
神埼はこちらに向き直り、再び僕の目を捉える。
「そう？なんか納得しちゃった。浅井君鋭すぎるんだもん。世間で言うところの鋭いとかそんなレベルじゃないよ。たまに恐かったし。だから、そういうことなんだってわかってちょっと安心した。」
「…安心？…」
「そう、安心した。受け入れられるってのが正しいかな？もし浅井君がその鋭さのことずっと隠し続けてたら、なんでこんなに深読みしてくるんだろうって、ちょっと怖くなってたと思う。でもこうやって浅井君のこと知ることができたら、理解ができる。もし浅井君が鋭いこと言っても、浅井君にはそういうところがあるって知ってるだけで全然違う。例えば、浅井君が私の考えがわかって嫌な気持ちになったとするじゃない？もし私が浅井君が鋭いことを知らなかったら、なんで浅井君が嫌な気持ちになっているかもわからないし、なんで浅井君は嫌そうにしてるんだろう、私が悪いのかなって、もっと暗い雰囲気になっちゃうかも。でも知ってれば、浅井君が嫌な気持ちになってる理由だって理解できるし、私はこんな理由でこんなふうに考えてますって説明もできるし。」
笑顔を見せる神埼。話してみれば、どうということもなかった。いや実際は神崎にも色々苦悩があったのかもしれないが、受け入れてもらえている。
「…普通は僕みたいなやつと付き合ってたら気が滅入ると思うよ。」
正直な感想だ。自分の考えが筒抜けだとわかっていたら、相当なストレスに違いない。作り笑顔も、嘘泣きも通用しなくなるのだから。
「私はばれて困るような考えは持たないから。もしそんなこと考えちゃっても、浅井君にならばれてもいいかな。それに…」
神崎の表情に寂しさが浮かぶ。初めて会った、あの教室でも同じ

表情をしていた。
「私、普通じゃないし。」
「その寂しさの理由は説明してくれるんだよな？」
「はは、やっぱりわかるんだ。うん、説明するよ。けど今は浅井君と田中君の話が先。」
そう言うとすぐ、神崎の顔から寂しさが消えた。

「今日の朝、田中君ともめてたのは、田中君の感情がわかったから？」
「そう。今日珍しく田中が僕より早く教室にいて、少し話してたんだけど、急に田中から感情が伝わってきて…今まで田中から感情が伝わってきたことってなかった。だからずっと一緒にいられたんだと思う。けど、今日の朝、田中は―」
「嫉妬の感情じゃなかった？」
神崎が僕より先に言う。
「嫉妬…ではなかったな。重苦しくて、吐き気のするような…憎しみだった。」
「憎しみ…」
神崎が僕の言葉を繰り返す。何か心当たりがあるのか、思案している。
「浅井君、言ってなかったんだけど…」
「…？」
「私、9月になってすぐに田中君から告白されてます。」
「…そうか…えぇ？」
思わず聞き流しそうになってしまった。
「言ってなくてごめん。田中君からも口止めされてたから…」
でも、あまり驚くようなことでもない。8月のキャンプの段階で、田中は神埼のことを好きだと言っていた。あれから1カ月の間に、決意を固めたのだろう。
「もちろん私には浅井君がいるからって断ったんだけど…浅井君、

田中君に付き合ってることまだ言ってなかったんだね。凄く驚いてた。だから、田中君嫉妬しちゃったのかなって思って。」
大いにあり得る話だ。だが、大いにあり得ない話でもある。田中は強い男だ。仮にそう思ったとしても、いつまでも引きずる男ではない。田中は常に原因を自分に求める男だった。
そのことを神崎に伝えると、神埼は妙に納得したような顔して言った。
「だったら浅井君、田中君が憎いって思ってた原因もわかるよね。」
「…？」
なぜ原因がわかる？僕は何とか頭を回転させる。
浅井君、と神埼は続ける。
「田中君と浅井君はずっと一緒にいたんでしょ？多分田中君のことだからひとまず浅井君に相談したりとかしてたんじゃない？そこまで信頼していた浅井君が、自分の片思いの相手を知っていながら奪った上に、それを隠していたら？」
僕の思考が一つの答えに結びつく。
田中の心に憎しみを生み出したのは、紛れもなく僕じゃないか。僕は田中が神埼のことを好きなことを知っていた。僕と田中には信頼関係があった。そういう仲だった。田中がいつか神埼に告白するかもしれないこともわかっていた。それならより一層、僕と神埼が付き合っていることを田中に伝えるべきだったのだ。神崎からこの真実を告げられた田中の心は、想像するに余りある。憎しみを、田中はずっと抑え込んできていたに違いない。だけど今日、何かの拍子でそれが溢れだしてしまったのだと思う。
「僕は…なんてことを…」
それなのに、僕が田中にとった行動は？投げかけた言葉は？
僕は田中を、裏切ったんだ。
「浅井君、夏目漱石の『こころ』って知ってる？」
唐突に神崎は僕に質問を投げかける。質問の意図がわからない。
「…何言ってるんだよ。」

「先生って呼ばれる人とKって言う人がでてくるんだけど、この2人は同じ人を好きになってしまいます。先生はKからその人のことを好きになったと打ち明けられます。Kは強い理想を持った人で、自分が人を好きになったことに苦しんでいました。」
神埼の口調は子どもに本を読み聞かせるように穏やかだった。
「ところが先生はKに内緒のまま、その人と結婚してしまいます。その後もしばらく、Kに打ち明けぬまま生活が続きました。そうしているうちに、下宿先の人がKに先生が結婚することを話してしまいます。」
「……」
「さて、Kはこの後どうなるでしょう?」
神埼の意図が少しずつ分かり始める。僕と先生、田中とK、それぞれが重なってくる。
「…どうなるんだよ。」
「死ぬの。自分で喉を掻っ切って。」
神埼の穏やかな表情が恐ろしいほどに残酷だった。

同日　午後９時４９分～

神埼と話をした後のことはよく覚えていないが、神埼に「早く行け！！」と蹴りだされたことだけは覚えている。とりあえずグローブとヘルメットを掴み、外に飛び出した。すぐにバイクに跨り、田中の家へと飛ばしていった。一体どれだけのスピードが出ていたのかも今となってはわからない。

田中の家は本当にぽつんと山中にある。小学校卒業以来となる田中の家は、すでに真っ暗で駐車場には車もない。とても人が住んでいるとは思えない様子だった。

とりあえず田中の家まで来てみたものの、まず田中が家にいるのかもわからないし、仮にいたとしてこの時間である。どうやって訪ねたものか。本当に自分の出来の悪い頭にがっかりする。

「とりあえずまだ死んでないよな…」

バイクから降りた僕は、そんなことを呟きながら玄関へと向かう。色々考えた挙句、結局馬鹿正直に正面から入ることにした。本当に使えない頭である。

いざ扉の前に立って、僕は固まった。インターホンもない古い扉。僕が小学生だったころから変わっていない。こういう扉ってノックでいいのだろうか？あの頃は馬鹿だったからノックもせずいきなり扉を開けていた。

「不審者注意だぞケーシィ。」

背後から声。

思わずビクッとなったのではないかと心配するが、声の主が主なのであまり気にする必要はない。

「田中…」

「こんな夜に何をしてるかは知らないけど、まぁ入れよ。」

あ、この扉鍵掛ってなかったんだ。

家に上がったはいいが、田中以外の人の気配はない。痕跡すらない。今通された応接間と廊下、田中が入って行った台所以外は真っ暗である。
「はいよ。まぁただのお茶だけど。」
田中がお茶と菓子を持ってきた。そして僕の正面に座る。
「田中、おじさんとおばさんは…？」
田中の両親には小さかった頃お世話になったものだが、今はほとんど会っていない。そもそも家はそんなに近くないから頻繁に来ていたわけではないのだが。
「今父親は中国じゃないかな、母親のほうは多分ドイツだ。」
な、何いってるんだこいつ…。
「すごい顔してるなケーシィ。今どき両親共働きなんて珍しくないだろ？」
いや、僕はそこに驚いてるわけじゃなくてだな…。
両親とも海外ってのは初めて聞いた。じゃあ田中は毎日、この暗い家に帰ってきているのか？どんな心境なのか、僕の想像では足らないだろう。
「それで、俺も海外に出ようかと思うんだ。」
「…は？」
田中の発言に、間抜けな顔を晒す僕。
な、何言ってるんだこいつ…。僕の思考は全く追いつかない。
「俺の視野は狭い！人間として小さい！もっと強い男になろうと思ってな！宇宙まで行けるような男に！本当は高校卒業と同時の予定だったんだが、近いうちには行動しようと思う。最近は準備のために徹夜でな。今日の朝なんか寝ないで始発まで起きてたよ。」
へへ、と田中は軽く笑う。
たかが高校生一人に何ができると言うのか。日本を出るのだって大変だと言うのに、どうするつもりなんだ。
「…なんで今…金だってかかるぞ？高校はどうするんだ。」

「そうだな。けど金は結構貯めたんだぜ？両親からの生活資金の仕送りも節約して貯金にして、アルバイトもやって、結構な額になってる。高校は…まぁ中退だな。」
「お前が部活に入ってないのって…？」
「あぁ、働いてたからな。時間がなかった。」
何食わぬ顔で、田中は言う。
田中の計画は知らないが、準備はかなり進んでいるらしい。
僕と田中は友達だった。だけど、僕の知らないところで、田中は僕よりもずっと大きくなっていたのだ。そして、その田中を今失おうとしている。とりあえず田中が死んでなくて良かったとは思うが、結局僕の前からいなくなってしまっては意味がない。
田中、と僕は呼びかける。
「お前が計画を早めるのって、やっぱり僕のせい…なのか？」
「んんー…まぁきっかけではあるかな。」
田中は少し考えて、視線を泳がせた。
僕はその場で土下座した。頭を床へと何度もたたきつける。
「すまない…僕は…！僕は…！」
「やめてくれよケーシィ。」
田中は悲しげな顔をした。
なぜ？自分を裏切った男が目の前にいると言うのに、こいつはなぜこんな顔が出来る？
「俺はもうケーシィのこと憎いなんて思ってないぜ？まぁ今日は疲れてたから少し感情的になったけど、それも俺のせいだからな。」
原因を自分に求める。田中らしい言葉だった。それに、と田中は続ける。
「こうやってケーシィが会いに来てくれたってことは、俺がケーシィを憎まないようにしたのは間違いじゃなかったってことだ。俺だってケーシィのことを憎んで、すまなかった。」
やめろ、やめてくれ田中。僕は、そんな人間じゃない。
僕は頭を上げられない。田中に優しくされればされるほど、合わ

せる顔がない。
「俺が今海外に行くってのは、今の俺の意志なんだ。誰のせいでもないよ。だからケーシィがそんなふうにする必要はない。まぁケーシィが謝りたいって言うなら好きにしてくれればいいけど…とにかく、俺は何とも思ってないから、これからは普通にしてくれよ？」
田中は僕の背中を軽くたたくと、そのまま台所へとお茶を下げにいった。

どれだけそうしていたかよくわからないが、田中がもう寝ると言うので、僕も帰ることになった。田中家から見る星空は予想以上に澄んでおり、思わず見入ってしまう。
あれがデネブ？アルタイル？ベガ？あれ？夏の大三角形って言うくらいだからもう見えないのか？
…自分の天体関係の知識の無さをここまで恨んだことはない。
上を見ながらバイクへと歩く僕。田中はバイクのところまで見送りに来てくれた。
「なぁケーシィ、なんでバイクに乗ってるんだ？」
唐突に田中が尋ねて来た。そう言えば、まだ話したことがなかったかもしれない。
「そうだなぁ…なんというか、僕は色々感じたいんだよ。車とか電車とか、そういうのって外の世界から隔離されちゃうだろ？それじゃつまんないからさ、そろそろ寒くなって来たなとか、空気が乾燥してきたなとか、そういうの感じながら生きていけたらいいなって思って。」
「そうか…」
田中は静かに頷いて、だからケーシィは色んなことを感じられるのかもな、と言った。
別にそんなことはないと思うのだが。
「じゃあ僕は帰るけど…田中。」
僕は最後に田中に呼びかける。

「急に僕の前からいなくなったりしないよな？」
「あぁ、もちろんだ。挨拶もなしに消えたりしないよ…あぁでも、」
そこで田中は寂しそうな表情を浮かべて言った。
「その時は宏美にごめんって…それだけ伝えといてくれよ。」
今になってみれば、立派にフラグを立ててしまっていたのだとわかるのだが。

同日　午後１１時～

それからだらだらとバイクを走らせてうちに帰ってきた。携帯も腕時計も持たずに出て来たので、どれだけ時間が経ったのかはよくわからない。

「ただいま…」

「あ、おかえり啓司。女の子連れて来たって？やるな～お前も。」

いつの間にか父が帰ってきている。母と2人並んで居間のテレビで映画鑑賞中だ。

「あ、啓司、女の子置いてどっか行ったらダメでしょう？」

「そうだ、誰かに襲われたらどうするんだ。」

家の中にいるんだから襲うとしたら浅井家の人間しかいないだろ。

「あぁ、気をつけるよ…」

相手をする元気はない。話もそこそこにして自分の部屋に戻る。

「あ、おかえり啓司。」

「あ、おかえり浅井君。」

僕の部屋の真ん中にチョコレートやらポテトチップスやらを並べて、2人仲良く座り込んでいる姉と神埼。

「何やってんだよ…」

「何って、啓司と優希ちゃんがどこまでの関係なのか聞いてるだけだけど？」

「聞くなよ…神埼だって困るだろ。」

「キスして舌まで入れましたって言っただけだけど？」

「言うなよ！！」

これ以上話されても困る。というわけで姉にはご退場頂いた。

「お姉さん面白い人だね。びっくりしちゃった。」

「僕は神埼のおしゃべり具合にびっくりだよ…」

なんで自分の姉にどこまでやったかを彼女から暴露されているかは良く分からないが、今までも分かったためしがないし気にしないことにする。
「それで…田中君は？」
神埼は恐る恐る僕に尋ねる。
「死んでなかったよ。だけど…」
僕は迷ったが、神崎だって田中の友達なのだから、話しておくべきだと判断した。
「近いうちに、田中は僕たちの前からいなくなるかもしれない。」
それから、僕は田中と話したことを神崎に伝えた。田中が海外に行くと言っても、神埼は思ったより驚かなかった。むしろ、納得という顔だ。この子はどこまでわかっているのだろう。
「そうか…いなくなっちゃうのか。けど、田中君のことだからそんな気もしてた。彼にはこの町も、この国も狭すぎるもん。」
田中君はさ、と神埼は言う。
「大きすぎるよね。人として。」
「大きすぎる…」
「イメージだけどね。そんな感じ。」
大きすぎる、田中にとってはそれが一番ぴったりな気がした。そんな田中がもっと大きくなる？地球では足りなくなるんじゃないか。
「田中、宇宙とか行きそうだよな。」
「うん、そうだね。行ってそう。」
神埼は僕を見て笑い、僕も神埼を見て笑った。

その後、時間が時間であるから、神埼を帰らせるかどうかが問題になった。僕の家から神埼の家までは大体２０分ほどかかるから、神埼の家に着く頃にはかなり遅い時間になってしまう。
「ねぇ優希ちゃん、今日うちに泊まったら？着替えとか私の貸してあげるから！」
僕たちが悩んでいる気配を察知したのか、部屋へとダイナミック

入室してきた姉。扉は足じゃなくて手で開けやがれ。
「えぇ！いいんですか？凄く助かります！」
しかしこの神埼、ノリノリである。
「おい神埼…無断外泊とか大丈夫なのか？普通はまずいんじゃ…」
浅井君、と神埼は僕の言葉を制す。
「私は普通じゃないよ？」
寂しさも少し感じられるものの、ほとんどウキウキな心境の神埼。
僕はあなたが楽しそうで何よりです。
「じゃあきまりだね！父さんと母さんには私が話しとくから！」
ドタドタと階段を駆け下りていく姉。扉ぐらい閉めやがれ。
「ふふ、お姉さん、妹が欲しかったんだって。だから年下の私と一緒にいられるのが嬉しいらしいよ。」
聞いてもいないのに神崎が解説してくれる。悪かったな弟で。
「でも浅井君のことも大好きみたいだね、あの様子だと。」
「当事者同士じゃよくわからないよ…ところで神埼、明日の準備とかどうするんだ？」
僕は明日のことを心配して、神埼に尋ねる。僕たちに小説のようなイベントが起ころうと、学校は無関係なのだ。都合良く休みになってくれるわけではないし、普通に授業が行われる。僕はともかく、人前では優等生な神埼はさぼるというわけにもいかないだろう。
しかし、神埼は僕の言葉が理解できなかったようで、あっけにとられた顔をしている。あれ、そんなに変なこと言ったかな…。
「浅井君、明日は土曜だけど、何か準備するものある？」
曜日感覚が狂うって、意外と恐ろしいことだったんだね。

と、いうわけで何の間違いか神埼はうちにお泊まりである。僕の両親は咎めるどころかノリノリである。年頃の息子が女の子うちに泊めるっつってんだからもっと咎めろよ。
そしてさらにノリノリなのが姉である。もう勘弁してくれ。
「優希ちゃん、私の部屋で寝るでしょ？啓司は危ないよ？」

「人を痴漢みたいに言ってんじゃねぇよ。まぁ神埼がそっちで寝ることに反対はしないけどさ。」
さすがにいきなり一つの部屋に2人きりというのは気が引けるし、神埼もそっちのほうがいいだろう、と僕は思っていた。が、甘かった。
「ありがとうございますお姉さん。でも…私…啓司君の部屋で寝ます。」
顔赤らめて何衝撃的なこと言ってんだこいつ。
「あ、そうだよね、私ったらなんて野暮なことを…！じゃあ後は若い2人で楽しんでね！」
逃げるように自分の部屋へと突入する姉。しかし数秒でまた出て来たかと思うと、啓司、と僕を呼んだ。
「避妊はしなさいよ。」
唖然とする僕。僕こいつと血繋がってるのか。嘘だろ。
じゃあ頑張って♪、と扉を閉める姉。二度と出てくるな。
「はは、浅井君の家には面白い人ばっかりだね…羨ましい。」
姉の部屋の扉を見ながら、呟くように言う神埼。そして元気よく続ける。
「さぁ、浅井君！」
「は、はい何でしょう？！」
神埼の声にまたしても下手に出てしまう僕。何やってんだ僕は…。
「今夜は寝かせないよ？」
秋の夜長と言うには少し早い気がするのだが、どうやら今夜は長くなりそうだ。

色々あって僕と神埼は一つの部屋に2人きりである。まぁ、あとは寝るだけだから特に何もないわけだが。
「じゃあ神埼ベッド使いなよ。僕は床で寝るからさ。」
「それはダメだよ。浅井君がベッド。そうしないと私寝ないから。」
そう言って神埼は僕の部屋の真ん中に座る。言いだすと聞かない

からなぁ神埼は…。
「あぁーそこまで言うならそれでいいよ…じゃあ電気消すよ？」
カチカチっと電気を消しながら、あ、たまに真っ暗だと寝れない人いるよな、と思い立つ。神埼は大丈夫だろうか。
「神埼、僕はいつも部屋真っ暗にして寝るんだけどさ、それでいい？」
「浅井君が襲ってくるわけじゃないよね？なら真っ暗でいいよ。」
なんでそんな発想になるのかは分からないが、姉と神崎の仲が良い理由はわかる気がした。
「それじゃ消すよ。」
カチっという音と共に部屋は真っ暗に。僕はいつもやっているように手探りでベッドへ向かう。でも今日は神埼を踏まないように気をつけなければ。
「痛っ！」
「あ、ごめん！！」
注意しようと思った瞬間にこれだから、人間ってダメだな…。
「ごめん…大丈夫か？」
「うん、大丈夫…やっぱり踏まれたら痛いね。」
そこで僕はあることに気付く。僕はまだ電気を消して一歩しか踏み出していないことに。
神埼、と僕は呼びかける。
「ん、何？」
「踏まれに来たな？」
「あ、ばれた？」
部屋の中央にいたはずの神埼、音もなく僕の足元まで忍び寄っていたようだ。そんないらねぇスキル身につけてんじゃねぇよ。
「浅井君が『この痛みが堪らない！』って言ってたから…」
「そんなこと言ってねぇよ！僕Mじゃねぇし！」
今度こそ神埼を踏まないようにして、ベッドへと戻った。

部屋を暗くしたものの、僕はすぐには寝つけずにいた。今日は色々と考えさせられることが多かった。頭の中はぐるぐると回りに回る。疲れているはずなのに、僕の頭は考えることをやめない。

「浅井君。」

神崎もまだ寝付けないようで、僕へと声をかけてきた。ベッドに横たわっている状態からでは床で寝ている神埼は見えない。

「少しお話しましょう。」

「そうだな。じゃあ何を話そうか。」

「それは浅井君が決めてよ。」

丸投げかよ。びっくりだわ。

「じゃあ質問…神埼の家族について教えてください。」

「…真面目な話すぎる…もっと楽しい話題にしてよ。」

なんだよそれ…いくら僕だって困るぞ。

「…ごめん、浅井君。さすがにちょっとイラッとさせちゃったかな。私のこと色々話さないといけないのかなって思うと、ちょっと逃げたくなっちゃって…でも大丈夫、ちゃんと答えるよ！」

そんなに無理して答えてもらおうと思っているわけではないのだが…神埼の決意は固まったようだ。こうなると神崎は引かない。

それじゃあ、と言って神埼は語りだした。

神埼の家は、両親と5歳離れた姉、神埼の4人で住んでいる。両親は大手の会社に勤めており、神埼が小学校に入学した頃にはほとんど家に帰って来なかったそうだ。神埼の両親はかなり優秀な人物だったようで、2人とも学歴こそ高くはなかったが、神崎が小学2年生の頃、会社の重役にまで出世した。しかし、神埼曰く、その頃すでに両親はおかしくなっていた。行動の初めから終わりまで、全てにおいて緊張していた。言葉の選び方まで、まるで演説のようだったそうだ。

「多分、人の視線に囚われちゃったんだろうね。あそこまでになっちゃうと四六時中誰かに見られてるように感じてたみたい。でも、

悪い人とか思わないでね。お父さんもお母さんも、実家のほうはお金なくて大変だったらしいから。」

神崎の姉は、順調に両親の後を追った。周囲からの評判も良く、優秀な子どもに育った。私立中学を卒業し、有名私立高校に入学し、偏差値ランキングの一番上にある大学に合格した。姉の周囲には、同じように優等生が集まった。しかし、姉は徐々に行動に不自然さが目立つようになり、笑顔はまるで仮面のようだったと神埼は言う。対して神埼は、家族の中で異質だった。姉を「優等生」と形容するならば、神埼は「変わり者」だった。小学校では教師に誉められるよりも叱られる回数のほうが多かったらしい。お姉ちゃんはクラスの中で成績でトップだったけど、私はやんちゃさでトップだったよ、と神埼は誇らしげである。そこまで違う姉妹であるが、決して仲は悪くなかったそうだ。

小学校最後の年、神埼は中学受験を強要された。もともと勉強はでき、合格する実力もあったらしいが、あまり気が進まなかったらしい。そのせいかはわからないが、中学受験は失敗した。神埼はそれでも良かったそうだ。しかし、両親はそのことを認めなかった。受験結果を聞いて激怒し、家族の汚点として、徹底的に神崎を叩いた。家から閉め出されもしたらしい。

「私の小学校生活はこれでおしまい。最高のバッドエンドでしょ。」

神埼は公立中学校に進んだ。その入学式に、両親は来なかった。ただその日の朝、父親に一言だけ言われたそうだ。―お前は社会の役に立てないんだから、せめて邪魔にならないように普通でいろ―それ以来、神埼は優等生であることに徹したらしい。せめて普通でいようと、自分を偽ってきたらしい。その甲斐あってか、中学校での評判は極めて良く、完璧な優等生を演じきれたという。

だが中学時代の間で、姉との関係は変わってしまった。神崎が中学2年の時、姉は大学受験に臨んでいた。神埼は家でまで優等生でいようとしてはいなかった。両親は仕事で家を空けているのがほとんどだったし、姉と2人きりのことが多かったからだ。しかし、そ

の姉からきっぱりと言われたらしい。―私はあなたみたいな出来損ないとは違うんだから、邪魔をしないで欲しい―。
「まさかお姉ちゃんからあんなこと言われるとは思わなかったなぁ…自分が優等生をやってるのに、ふらふらしてる私が許せなかったのかもね。」
姉は大学に合格し、上京してしまった。一言の会話もないままだったそうだ。
神埼は四六時中優等生を演じ続けた。うちも外もなかった。朝から晩まで、一人でいる時以外はずっと優等生であり続けた。そうすることが神崎が家にいられる唯一方法だった。
神埼の高校受験の時、中学受験の時とは違い両親は特に何も言ってこなかったという。神崎が両親に恐る恐る聞いたところ、前に言ったとおりだ、とだけ言われたらしい。そして神埼は僕と同じ高校へと進学してきた。

「これが私、神埼優希の家族です。お世辞にも聞いてて楽しい家族じゃないね。」
はは、と軽く笑う神埼。無理して笑っているのがはっきりとわかる。
「でもさ、別に私気にしてないよ。生きてれば嫌なことなんていくらでも起こるんだもん。感情だってめまぐるしく変わるし。私は今浅井君と一緒にいることを大切にしたいし。」
僕はかける言葉が見つからない。感情は変わる。そんな当然のことに今さら気付いた。
「あぁ切なくなっちゃった。浅井君、どうにかしてよ。」
神埼はぶっきらぼうに言う。無茶振りすぎるだろ。僕にどうしろと。
「…えぇ…」
僕が無様に無能ぶりを晒していると、隣で神埼が立ちあがる気配がした。さらに僕のベッドに乗ってきて、もぞもぞと何かしている。

これは…まさか…？
「ちょっと浅井君、腕。」
間違いなく、あれだ。僕は確信する。神埼が僕の腕の上に頭を預けてくる…。
腕枕じゃん！真っ暗な部屋で腕枕って！ヤバいって。
「…女の子が切ないって言ってるんだから抱き寄せてくれてもいいんじゃない？」
「え、あぁ、うん…」
僕は神崎に言われた通り、神埼の体を抱き寄せる。神埼の存在を感じる。偽りのない、確かな、神埼優希。神崎が出来損ない？どこがだよ。優等生じゃなくたって、人と違ったって、ここでちゃんと生きてるじゃないか…！

「浅井君…苦しい。」
ふと我に帰る。いつの間にか腕に力が入っていた。ごめん、と言いかけて神埼に遮られる。
「けど、ちょっと嬉しい。浅井君意外と抱き心地いいし。」
いやあなたには負けます神崎さん。あなたの抱き心地の良さは抱き枕にして売ればビル・ゲイツもびっくりの売り上げを記録するのではないかと思うほどです。
「放課後って、いい時間だよね。」
唐突に神崎は言った。真っ暗な部屋に、神埼の声が心地よく響く。
「誰もいない、隔離された空間。この世界に私だけ、なんて感傷に浸っちゃったり。」
僕の返事を待たずに、神埼は続ける。放課後。僕と神埼が初めて会った場所。お互い顔も名前も知らなかった。けれど、何カ月も前から知り合っていたような、懐かしい、不思議な一体感があった。
「だけど私、やっぱり寂しかったんだね。何かに期待してた。王子様なんて来るはずもないのに。その代わり…浅井君はいたわけだけど。」

僕の腕の中で微かに動く神埼。王子様の代わりが僕…ちょっと役不足かなーうん。

「私の家族はみんな私から離れていっちゃったけど…浅井君の家族が私の家族になるなら、それも受け入れられるかな…」

「……？それどういう…」

言いかけて、神崎がスースーと寝息を立てていることに気づく。いつの間にか暗順応した僕は、神埼の安らかな寝顔を眺めることができた。これは反則だろ。可愛すぎるだろ。

そう言えば神埼の寝顔に惑わされて言いそびれてしまったから、ここで言っておこう。

僕の話を聞け。

10月10日　午後6時〜

気付けばもう秋である。僕にはもう二度と、今年の夏は来ない。そしてやってくる秋も、去年の秋とは別の秋。時間が戻れば、また田中に会えるのだろうか。田中は僕に会ってくれるだろうか。

今日、田中の名前が名簿から消えた。と言っても、田中の姿自体はもう消えて久しい。名簿の名前など、田中が消えたということの裏付け程度のことだ。まぁ、それがわかるのは僕と神埼だけなのだけど。

「浅井君。」

いつも通り教室で神崎が来るのを待っていると、まさかの女子高生が現れた。と言っても初対面でもないし、むしろ深い仲のほうなのだけど、田中のこととなると僕は口が重くなってしまう人物、中村である。

「今日、和平の名前なくなってたよね。浅井君、何か知らない？」

中村は僕に詰め寄ってくる。僕はずっと、中村に田中の行動を話していない。

田中和平。この名前が呼ばれることはもう、ないだろう。少なくとも、僕たちの高校生活から田中は退場した。再登場するのは、何年後かもしれないし、何十年後、もしかしたら一生登場しないかもしれない。

「ごめん、分からない…」

中村の目が僕の目を貫く。僕が何か知っているという確信でもあるのか、その目は揺るがない。

「本当に？浅井君にも何も言ってないの？」

何度も念を押してくる。僕の嘘はあっと言う間に見破られる運命にあるらしい。

「あぁ、何も言わずに消えちゃったよ。」

しかし、僕は田中の言葉に従う。―その時は宏美にごめんって…

それだけ伝えといてくれよ—僕が余計なことを言う必要はない。田中はきっと、自分で中村に話をするだろう。それがいつのなるかはわからないが、僕は待つつもりだ。
「そう…じゃあね…」
中村の目は急に力を失う。とぼとぼと去っていく背中は、背筋もしっかり伸びているのに妙に小さく見えた。
「あぁ、けど、田中が言ってたことがある。」
「…何？」
中村は振り向いてこちらを見る。もう僕に興味はないのだろう。早く言えと急かすようでもある。
「…ありがとう…だってさ。」
ごめん、田中。お前の言葉には従わない。
ふっと中村が笑う。
「私も和平も…馬鹿だなぁ本当に…」
何かがはじけたように、中村は泣いた。声をあげ、顔をくしゃくしゃにして、泣いた。その場にしゃがみ込んで、泣き続けた。

しばらく経って、中村は立ちあがる。
「はぁ、すっきりした。ごめん浅井君、私帰るね。」
そう言ってあっさり教室を出ていく中村。もう何の心残りもない、吹っ切れた清々しいまでの後ろ姿だった。
再び教室に一人になる。今日はグラウンドを使う部活動は休みらしく、遠くから車が通り過ぎる音が聞こえるだけで教室は静かなものだ。この時期にもなると、さすがに日が短くなってくる。外はうす暗くなり、山の端に太陽が飲み込まれていく。
「…遅いなぁ神埼…」
神崎を送り迎えするようになってからずっと、僕はいつも教室で神崎が来るのを待っている。特に約束をしたわけでもないが、自然とそうなっていた。いつもはそう遅くない時間に神崎がやってくるのだが、今日は妙に遅い。探しに行こうかとも思うのだが、どこに

いるのか見当もつかず、結局教室でぼけーっと待っている。
「よっこいしょ…あ、よっこいしょって言っちゃったよ…」
さすがに待ちくたびれた僕は、神崎を探しに行くことにした。学校内では携帯の電源を入れていない神埼は、本当にどこにいるのか分からない。
その時、なぜか僕の携帯が鳴動し始めた。
あれ、マナーモードにしてなかったっけ？けど、授業中にならなくて良かった。軽く没収だったぞこれは…。
「…あぁ…」
思わず声が出てしまったが、授業中に僕の携帯が鳴る確率はほぼないことに気付いた。
僕にはそんな友達いないじゃん…メルマガも登録してないし。
「…はい。」
「あ、浅井君？まるで海底2万里くらいまで潜航した状態でノーチラス号が故障したくらい絶望的な声出してるけど、まぁそんなことは置いといて、今どこにいるの？」
置いとかれた…神崎にまで置いといかれた…僕は何を頼って生きていけばいいんだ…。
携帯を耳にあてたまま、立ち尽くす僕。誰か友達になってください…。
「ネモ船長もまさか学校の教室で引き合いにだされるとは思ってなかっただろうな…」
「あぁやっぱり教室にいるんだ。ごめん、私用事があって今警察署にいるんだよね。こっち来てもらえる？」
「警察？…まさか…神埼…」
「そう私、殺っちゃった。テヘッ。」
「テヘッじゃねぇよ！予想だにしないところでボケに乗ってんじゃねぇよ！」
「うう…浅井君が喜ぶと思ったからやったのに…」
「…ごめんなさい。」

完璧に神崎に遊ばれている僕。なんてこった。まぁ別に嫌な気はしないのだけど。
あれ？もしかして僕Ｍ？弄るより弄られる側？
「じゃあ早く来てね。今ならモザイクありでしか放送できないような服で待ってるよ。」
「なに？！今すぐ行くから待ってろ！！」
僕は教室を飛び出す。待ってろ神埼、どんなヤバい服装なのか見てやる！！

「あぁ…なるほど…」
到着した僕を迎える神埼の服装は至って普通だった。制服の上半身がＴシャツになっているだけである。なんでも神埼のクラスは早くも文化祭（僕らの高校では１１月に文化祭がある）の準備をしているらしく、作業のために着替えたらしい。ただそのＴシャツには某テーマパークの黒ネズミがでかでかと描かれている。確かに放送できねぇ…。
「…浅井君、何を想像してたの？」
明らかに残念そうな顔をしている僕を不審そうに見る神埼。前かがみになって僕の顔をみあげている。しかし、僕は気付いた。神埼の胸元が微妙に見えることに。やはり出るところは出ているな神埼。もう満足です。
「いや、そんなことより神埼はどうしてこんなところにいるんだ？」
僕は無理やり話を逸らす。
神埼のサービスカットに期待していたなんて言えない！言えないよ！
「…？まぁいいけど。前さ、自転車盗まれたって話したの覚えてる？あれが見つかったって連絡があって取りにきたんだけど。けどその自転車、見つかった段階で早い話ただの鉄屑だったんだよね。もう処分するしかない状態。本当は自分で処分しなきゃいけないらしいんだけど、係の人がいい人でさ、処分頼んじゃった。」

さらっという神埼。
確か、８月の補習が始まった頃だったか。神埼の自転車は盗難にあった。鍵を壊されて持ち去られていたと神埼は話していたと思う。そう言えば僕が送り迎えをするようになったのはそれがきっかけだったか。
でもあの自転車は、神崎にとって大切なものであったはず。盗まれた時はとてもショックを受けていたのに…。
「いいのか？あれ神埼大切にしてたじゃないか。」
「あ、そうか、浅井君わかるんだねそれも。」
神埼は僕が鋭いことにも慣れてきたようで、あまり驚かなくなっている。神埼は少し寂しそうな顔をして、僕に説明する。
「あの自転車、お父さんが買ってくれたやつなんだよね。私が中学校で成績一位になった時に。私には基本的にお金が渡されるだけで必要なものは全部自分で買ってたから、お父さんに買ってもらったのは自転車だけ。全然身長と合ってなくて笑っちゃった。でも、嬉しかったなぁ。」
神埼はさらっと凄いことを言う。お金を渡されるだけって…中学生の娘に？
「何と言うか、自転車って私が神埼家である証なの。これ以外じゃお金でしか繋がってないから。けど、もう必要ないかな。」
神埼は決意した顔で続ける。
「私は神埼家に合わせるのをやめる。お父さんもお母さんも幸せを追い求めてあんなふうになったんだと思うけど、幸せの形って色々あるじゃない？だから私はお父さんとお母さんとは違う形で幸せになる。そしたらさ、私の存在も少しは認めてもらえると思うから。」
僕は黙って神埼を見ていた。この女の子が背負っているものは、僕の悩みなどちっぽけに見えるほど大きく、そして重いものに思えた。
「だから浅井君。」
神埼は僕の目をじっと見る。今日は一段と澄んだ目に見える。

「私を幸せにしてね。」
ふっと僕は笑った。そんなこと言うのはプロポーズの時くらいだろ。
「あぁ、幸せにするよ。」
よろしくね、と言って神埼も笑った。警察署の前とは、なんとも様にならない。

「よし、帰ろう！」
神埼は勢い良く宣言する。夜空には月がくっきりと見えている。その周りに薄く雲が漂い、月明かりに照らし出されていた。
「明日は晴れるかな？」
僕は呟き、ふと思った。田中はどうしているのだろう。あれから一ヵ月ほど経つが、ちゃんと屋根のあるところで寝ているのだろうか。今となっては知る手段もない。僕がテレポートでも出来れば会いに行くのだが。
「田中君なら大丈夫だよ。」
神崎が突然答えた。どうやら神崎まで妙に鋭くなってきたらしい。僕が不思議そうにしているのが分かったのか、そんな顔してたよ、と神崎が説明してくれた。
「そうだな、田中なら大丈夫だな。」
僕もそんな気がしてきた。そう、田中なのだ。ちょっとやそっとでくたばる男ではない。
「ところで浅井君、私たち今まで運よく雨に遭ってないけど、合羽とか準備してるの？」
神崎に言われて、そういえば、と答える僕。
確かに僕たちは雨の中を走ったことがなく、合羽の準備はできていなかった。そろそろ雨が降ってもおかしくない。近いうちに準備しなければならないだろう。
「近いうちに準備しないとね。…だけど、多分明日は晴れるよ。」
僕は何の根拠もなく言った。本当に勘だった。

「そうだね、明日は晴れるかも。」
神崎も同意してくれた。神崎が言うのだから、きっと明日は本当に晴れだ。
「さぁ、帰ろう！」
僕は神埼を乗せ、夜道へと走り出した。
街灯が、スポットライトのようでもあった。

１０月１０日　午後６時～（後書き）

次回はエピローグになります。

12月18日　午前11時～

～エピローグ～

冷戦時代に熾烈な競争を繰り広げ、人を地球から解放した宇宙開発であるけれど、現代となっては一つのビジネスでしかない。今から8年前だったか、確か東欧。民間企業が独自開発した人工衛星の打ち上げに成功したのだ。莫大な資金と人材が必要だった宇宙開発が、国の手を離れた瞬間だった。当時は世界中に緊張が走ったと思う。打ち上げロケットの開発と、弾道ミサイルの開発との間に、大きな違いはないからだ。しかし、しぶとく世界はまだ生きている。きっと僕たちの知らないところで極秘裏に何かがあったのだろう。そろそろそれをテーマに適当なストーリーの映画でも公開されるんじゃないだろうか。

しかし技術の進歩ってのは止まることを知らないようで、国家、民間双方が宇宙探検に乗り出し、次々と惑星への着陸を成功させている。そういえば先日ニュースで見たのだが、そろそろある探査隊が地球から連絡ができる限界の距離に達するらしい。今でも相当な時差のある連絡になっていたはずだが、遂に連絡ができなくなるのか。宇宙飛行士たちはどんな思いで宇宙を旅しているのだろう。もし僕だったら、割とマジで発狂する。

「あれ、珍しくテレビ見てるんだね。」

寝室から出て来た優希は目を擦りながら僕に声をかける。寝ぐせが激しく自己主張しているが、そんなことは全く気にならないらしい。日頃もどこか抜けている優希だが、休日となるとその抜け具合は凄まじく、太陽が高くなってから起きてくることも珍しくない。

そして僕はと言えば規則正しい生活が災いして、きっちり朝6時

３０分に目が覚めてしまった。もちろん隣で優希は爆睡中で、溺愛している猫さえ相手にしてくれない。しかも外は雨。走りに行くこともできない。僕は朝御飯を食べ、家中の掃除をして、クラシックのＣＤを聴き、起きて来た猫に御飯を与えてひとしきり愛で、遂にやることがなくなってテレビを見始めたのだった。僕も優希も基本的にテレビよりネットで情報収集するタイプな上、暇があればツーリングに出かけるので、あまりテレビを見ない。そんな僕がテレビを見ているということから、僕がどれだけ暇だったのかを察してほしい。

「優希が相手してくれないから暇だったんだ。」

「はは、啓司寂しかったんだ？ごめんね～」

ノロケである。

テレビは先述の宇宙飛行士の映像を映し出している。まぁこれが最速の放送であっても、映像が撮られたのは結構前のことになるのだが。男女４人ずつで編成された探検隊は、誰もがエリート中のエリートであり、まさしく人類未踏の地…まぁ地ではないが、そこに踏み入るのにふさわしいと言えるだろう。

宇宙飛行士一人一人から一言ずつコメントが述べられる。地球に残してきた家族に向けてとか、大変な名誉であり誇らしく思うとか、そんな感じのコメントだ。

「ねぇ啓司、この人、田中っていうんだね。」

優希がテレビの一番端に映る日本人宇宙飛行士を指して言う。

「あぁ本当だ。」

返事をしながらその宇宙飛行士を見る。色黒の顔、凛々しい顔つき、口元から覗く白い歯。その目は活気に満ち満ちている。

……！？

「田中！」
僕は思わず叫んでいた。日本人にはさほど珍しくない名字を叫んでいる三十路の男の姿は、かなり滑稽であるに違いない。
「どうしたの啓司？」
「田中だよ！田中和平！」
「…え？…本当に…？」
僕と優希は茫然と画面を見つめた。その画面の中央に、田中の姿が映る。

「どうも、田中です。このように優れた人材に囲まれて、人類にとって初めての試みに臨むことができることを心から嬉しく思います。地球を恋しいと思う気持ちはありますが、私のこの試みを成功させたいという思いは揺るぎないものです。地球の皆さんとは少しの間お別れとなりますが、我々は必ず帰ってきます。帰って、みなさんに我々の見たものをお話します。きっと皆さんの世界は大きく広がると思います。人類はもっと大きくなれるでしょう。世界は思った以上にわくわくすることで溢れています。今日が良い日だった人も、そうでなかった人も、大丈夫です。明日はきっと良いことがありますよ。それではみなさん、またお会いしましょう。」

はい、映像はここまでとなります。我々日本人の中からこうやって—

ニュースキャスターがコメンテーターと話し始めた。
僕と優希はまだ画面を見つめている。
「あいつ大きすぎるだろ…」
「…もしかしたら太陽系…銀河系でも狭いんじゃない？」
そうかもしれない。
僕と優希は、顔を見合わせて笑った。

「そうだ！」
今度は優希が叫ぶ。優希の思いつきは大抵無茶苦茶だが、今回はいいことを思いついたようだ。
「天体観測しようよ！高校の頃行ったキャンプ場行ってさ！」
高校の頃、キャンプ場…。
田中の祖父が経営していたキャンプ場。今も田中の祖父が経営しているのかはわからないが、確かに天体観測にはうってつけだった気がする。
「あぁ、そうだな。行こう！」
いつの間にか雨も止み、日が差し始めていた。なんという好都合な展開。
「もしかしたら田中が見えるかもな。」
「ふふ、そうだね。田中君大きいし。」
優希とまた顔を合わせて笑う。
「中村も誘う？」
僕は優希に尋ねる。中村は国営放送のアナウンサーになっていて、かなり多忙らしい。
「うーん…宏美を誘うのは…」
優希は少し考えたようだが、首を横に振った。
「田中君が帰ってきてからね。」
そうだな、と僕が優希の言葉に従うと、それじゃあ、と優希は早速準備を始めようとする。
いや、その前に。
僕はわざとらしく下手に出て優希に言った。
「ランチに致しませんか？」
いつの間にかテレビは天気予報に変わっている。
今日から明日にかけて、全国的に晴れるらしい。

１２月１８日　午前１１時～（後書き）

これでこのお話はおしまいです。
最後まで読んでくださった方、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4938o/

とある高校生のお話

2010年11月9日18時55分発行